

---

# IS 衛星砲をもつIS

ごん助

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS衛星砲をもつエス

### 【Zマーク】

Z8200C

### 【作者名】

ごん助

### 【あらすじ】

「ごみ漁りが好きな少年がテンプレな出来事でちょっと変わった転生をして日々を過ごすお話

## プロローグ（前書き）

初めまして、もしくはこんにちは。  
何やつてんだと言われるかもしませんが、仕方ないので  
ごめんりとお楽しみください。

## プロローグ

意識がはつきりとしてくる。

目を開けるとそこには何もなかつた。

俺の宝がない！

今ここに手があったのならば必死にして探していただろう。  
しかしここには手と思われるものは無かつた。  
なぜならここには、

ん、やつと起きたかの？

生と死のはざまの空間だつたから。

れて、少しばら落ち着いてくれたかの？

あ、はいすいません、ご迷惑をかけて

その空間には姿の見えないものと意識だけの存在がいた。  
心なしか姿の見えないものの声がやつれているようだが。

それで、今までに言つた事はわかつてくれたかの？

ええ、大体は。簡単に言えば部下のせいで僕が死んでしまったから、ランダムに能力を付けて別の世界へ飛ばすって事ですよね？

うむ、その通りじゃ。…ならばさつと能力と機体を決めてしまおうかの

意識体の前に六枚、そのうち三枚で分かれているカードが出でくる。

あれ、能力だけじゃないんですか？

うむ、お主がいく場所にはちょっととしたものがあつての、それをお主にも与えるという事じゃ。

わかりました……じゃあ、これとこれで

意識体は一枚のカードを選んだ。するとその選んだカードが消えて、見えないものの声が響く。

ふむふむ、了解した。次はこのカードじゃ

残りのカードが消え、代わりに禍々しい雰囲気のカードが出てくる。

意識体は一瞬ためらつた後に決意したのか一枚のカードを選ぶ。

「これは…

え、どうかしたんですか！？

いや、少し前の子が可哀そくなつての。彼には少しあまけ

しどかなことな。もあらうおおににもじやがな

意識体は思ひ、こんなに適当でいいのか！？。

思ひんじやよ、ひつせ本職じゃないしの。…わい、準備すれども  
たゞ、逝つてへるとい良二

いくの声がちが

全てを言つさる前に意識体は消えていった。

それを見送つたものは、

わて、もう一仕事頑張るかの

と呟いたやうだ。

## プロローグ（後書き）

こんな感じで進めてこたえます。  
以降、よろしくです。

キャラ、機体説明（前書き）

安直な主人公の名前。

## キャラ、機体説明

我道 藍 がどう らん

本作の主人公。前世の記憶は無い。

趣味は楽器を弾くこととガラクタ漁り。

孤児院育ち、面倒見がいい。

見えないものからはガンダムXと不思議な体をもらっている。  
ちなみに不思議な体とはアニメのガンダムXのように異様に頑丈な  
体の事である。

容姿はガロード・ラン

ガンダムX

旧連邦軍が開発したガンダムシリーズで最強を誇る機体。

“サテライトシステム”を装備した対コロニー殲滅用のガンダムであり、その破壊力は最大出力だと一撃でコロニーを破壊する。

“Gコントロール・ユニット（Gコン）”と呼ばれる着脱式のコントロールレバーが起動キーになっており、Gコンがなくては動かすことができない。ティファの導きでこのガンダムを発見したガロードがパイロットになるものの、フォートセバーンでカリス・ノーティラスと対戦した際に破壊されてしまった。

装備のシールドバスターライフルは、シールドとしても使用可能なライフルで、装甲は通常の3倍。ビームソードは戦艦クラスの装甲も切り裂くほどの威力を持つ。シールドバスターライフルもビームソードも、サテライトシステムからエネルギーが供給される仕組みとなっている。

またガンダムタイプのモビルスーツには、ニュータイプ能力に対応したフラッシュシステムが搭載されており、専用のビットモビ

ルスーシ（Gビット）を1-2機コントロールすることが可能であった。ガンダムXの場合、サテライトシステムの初動時における回線接続は、このフラッシュユニバーサルシステムによるサイコミコ通信でしか行われないものであった。

## ホームサ

イトより抜粋。

## 武装

- ・サテライトキャノン×1

言わずと知れたばかげた威力を持つ武装。

- ・シールドバスターライフル×1

ビーム銃でありながらシールドを装備した特殊兵器。通常のシールドの3倍の装甲を有し、ビームライフルとして使用しつつ敵からの攻撃も防御する。エネルギー源はサテライトシステムからで、通常はサテライトシステム下部にジョイント・格納する。

- ・大型ビームソード×1

接近戦用の兵器。通常のものよりも大型で、戦艦クラスの装甲も貫くほど。エネルギー源はサテライトシステム。出力が高いためグリップも独特の形状を有する。

- ・ブレストバルカン×4

胸部内蔵型のバルカン砲。

- ・ショルダーバルカン

左肩部への追加武装。

## ガンダムXディバイダ

カリスのベルティゴにより破壊されたガンダムXを、チーフメカニックのキッド・サルサミルが改造したもの。

状況に応じて使えるバリエーションのある武装として以前からキ

ツドが温めていた独自のアイディアで、破壊されたサテライトキャノンの代わりに装備が加えられた。

その中で主力とされた装備がデイバイダーである。大型の盾として使用されるが、中央から一つに割れると19連装ビーム砲（通称：ハモニカ）となり、連射が可能。両サイドのバーニアにより、ビームを発射しながら地上を高速移動することもできる。また、デイバイダーをバックパックに装着し、他のバーニアと併用することで、長時間滞空も可能になった。バックパックには飛行用可変バーニア2基とエネルギーポッド2本が装着されている。

ガロードがダブルエックスに搭乗するようになつてからは、Gコントロール・ユニットがなくても操縦できるよう改造され、ジャミルがパイロットとなつた。

## ホー

ムサイトより抜粋

武装

・デイバイダー × 1

ジャンクパーティを組み合わせて、ガンダムXの装備にしたもの。試作用の展開式シールド、モビルアーマー用大口径スラスター、革命軍の対モビルスーツ用多連装ビーム砲（通称：ハモニカ）を用い、補助飞行ユニットとしても使用できるよう組み上げられた。

通常用途のシールドに加え、補助飞行ユニット、19発多連装ビーム兵器の機能を併せ持ち、ガンダムX改造後的主要装備として活躍する。

・ビームマシンガン × 1

デイバイダー同様、ジャンクパーティで組み上げた兵器。旧連邦の戦艦に装備されていた2連装メガ粒子砲をビームマシンガンとして改造したもの。

・ビームソード × 2

ガンダムXに装備されたものと同じ。

- ・ブレストバルカン×4  
胸部内蔵型のバルカン砲。

少しだけ追加設定。  
フラッシュシステムは既に登録済み。  
ディバイダ に換装可能。

キャラ、機体説明（後書き）

抜粋はまづかつたかな…？

## 第一話

「エリカが…」

隣で一夏が茫然としている。まあ、そうだろうな、なんたってこの子は男子が居ないはずのH.S学園なんだから。

「ほれ、突つ立つてんなよ一夏、周りからじろじろ見られてんだか  
ら」

「あ、…つとわりい」

全く、一緒に居るこの子の身にもなれっての。そもそもお前が道を間違えなければこんなことにはならずに普通に藍越学園に入っていたといつのこと。

「ほれ、女子に見とれるのは良いがほどほどにしどけ、こいつが恥ずかしい」

「別に見とれてねえよ！」

どうだか。ここに居る女子だけでも美少女といえる子ばかりだからな。…おっと、話がそれていたか、さつさと教室に向かわないとな。

「行くぞ一夏、俺たちが行く教室は…つと」

「えつと、一年一組、だな」

そうだった、さつさと行く。わざから女子の好奇の眼が突き刺さっているし。

「あ、ちょっと待てって！」

後ろで一夏が何か言つてるが無視して先へ進む。……ん？ あれはまさか！

「あれ、いつの間にお前教室へはいったんだ？」

「……お前の悪い癖が始まつてたから先に行つたんだが……お前が来てくれて助かつた……」

あ～こりやきついな、さつきだつて教室に入つた瞬間一斉に視線が集まつたからな。あれにはマジでビビつた。

「いつもの癖でな、あれを見ると衝動を抑えきれなくてな

一夏の後ろに座りながら言い訳をする。仕方ないんだよ、余りもので作れるものなんてたくさんあるんだから。

「さて、そろそろ始まるみたいだぞ？」

「ん、そうだな」

さて、俺たちの担任はどんな人なのかな～などちょっと期待していた。そこに入ってきたのは。

「全員揃つてますねー。それじゃあSHR始めますよー」

見た目は子供、中身は大人を素で体現したような先生だった。

「…それでは皆さん、一年間よろしくお願ひしますね」

山田先生？ だつたかな、先生が何か言つているようだが耳に入らない。今俺の脳内では臨時会議が行われていたから。

脳内A あれは何だ！？ まさしくロリ巨乳というジャンルを体現している先生ではないか！？

脳内B しかも見た感じドジっ子の特性も持つてているようだ、ぐつと来るものがあるな。

脳内C そもそも、どんな食事をしたらあんな体型になるんだ… 気になるな…

？？？ 何言つてんだお前らー・ティファアが一番に決まつているだろ！？

A B C !？

なんてくだらない会議をしていたら頭にものす」こ衝撃が襲つた。  
意識が急上昇し、そこに陥たのは

「何をしてくる、馬鹿者」

「ぬおつ、畠布…？」

ズドン…およそ出でなければいけないだろ?と思われる音が俺の頭の上で響く、それに伴う激痛。

「誰が三國志最強の武将だ、馬鹿者」

織斑先生、あなたの背後に般若が見えます。しかし何故に女子が涙田なんだ?訳がわからん。

「ぐおおおおおお…」

「お前の番だ、せつせと皿口紹介をしろ」

皿口紹介?ああ、今はそんな時間か。…しかしこの気まずい雰囲気は何なんだ、一夏、お前何かしたんだろ、そりゃなきやこんな空氣にはならないし。

「つ…了解…我道 藍だ、趣味はガラクタ漁りだ。よろしく頼む  
せ」

まあ、これでいいだろ。…ん?ビーフした一夏、そんな顔をして。

「お前…千冬姉のあれを何度も食らって平氣なのかよ…」

「ああ、それが、やけに俺つて体が頑丈なんだよね。…ビツしたんですか織斑先生？」

「やはりお前用に鉄製の物を用意した方がいいのか…」

それやつたらもう人殺しの範囲でつせ織斑先生。絶対に耐えれる自身がない。

何かあの二人の先生が話していくけど頭の痛い俺には聞きとる余裕がなかつた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜く事だ。逆らつてもいいが、私の言つ事は聞け。いいな」

それはもう脅迫の類です。先生。恐らく一夏も同じ」とを考えてるだろ?。

ん?逆らつたらどうなるかだつて?決まつてゐじやないか、俺の頭がトマトになるば。

「キヤー——！ 千冬様、本物の千冬様よー！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

「あの千冬様にじご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉さまの為なら死ねます！」

なんだこれ、新手の宗教団体か？心醉率がとんでもないんだが。「…毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心せられる。それでも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

そのとおりだと思います、せんせー。いつそのこと、宗教立ち上げたらどうですか？なんて事を考えてたらチョークが飛んできた。頭に当たったと思ったら粉末状になつていった。…どんだけの威力で投げてんですかあんたは。

「わやあああああー… お姉さまー もうとどつてー… 鳴つてー…」

「でも時こな優しくしてー…」

「そしてつけあがらなこよつて隠をしてー！」

凄い結束力だね、これは。三十人三十一脚普通に出来るんじやないのか？

「わや、我道」

「はー、なんですか？」

「返事をするときは何でしょーか、だ。お前は何もしてなくとも殴られると思つておけ」

「理不尽だー」

もう強制過ぎて何も言えねえよ、どんだけストレス溜まっているんですかあなたは。田が本気なのがホントに怖い。

「まあ、良いだらう。これでSHRは終了だ。諸君らにはこれからISの基本動作を半月で覚えてもらひ。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ、よくなくとも返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

脅迫です、理不尽です。それでも純情にうなずく女子たち……怖いです。

こうして俺と一夏の男一人だけの学校生活は幕を開けるのだった。

## 第一話（後書き）

やつべつと、書ける範囲で書いてこいつと黙こもる。

## 第一話

さて、結果から言つと一夏の状況は思つたよりひどかった。  
そりやあ、いきなりの入学だし内容を覚えにくいだらうなど、だからと言つて電話帳と間違えて捨てるのは無いだらう。

ちなみに俺は機械系にものすごく興味があるし、八割くらいは覚える事が出来た。

「ちょっと、よろしく！」

一時間目後の休み時間、一夏に金髪ロールの見るからにお嬢様な女子がやってきた。

ちなみに一時間目は篠とかいうポーテールの女子が話しかけていた。まつたくもつて絡まれやすい性質なんだよな、一夏つて。そんな事を思つてこりのうちに一人の会話は進む。

「何の用だ？」

「まあ、なんて返事ですの。私に声を掛けられるだけでも光榮ですよ。それ相応の態度というものがるんではないかしら？」

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「私を知らないと…？　あなたはどうなんですかー？」

気が付いたらお嬢様風の女子に名前を聞かれてた。

「ああ、確か…セシリ亞・ビルギットだろ？」

「オルゴット、です！ 私はセシリア・オルゴット。イギリスの代表候補生にして入試主席ですよ」

上手く聞こえなかつたけどセシリア・ビルギットって言つてたよな？

「代表候補生、ね…専用機持ちか？」

「その通りですよ。これで私の偉大さが…」

「なあ、藍」

地味にこんな態度の子でも代表候補生になれるのか～みたいな事を考えてたら一夏が話しかけてきた。

「代表候補生つてなんだ？」

話を聞いてたんだらう女子数名が思いつきりこけたのが見えた。  
とはいひ俺も結構ビビった。

見ろ、あのビルギットも睡然としているぞ。

「あ～、搔い摘んで説明すると、国家代表の操縦者の候補だ。簡単に言えばプロにスカウトされた原石みたいなモンだつて考えればいい」

「へえ、凄いんだな」

「…あなた、私をバカにしてますの？」

恐らく素じやない？ そう言つてやうつかと思つたけど、やめた。

なんか可哀そうだと思つたから。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しきらい知的さを感じさせられるかと思つていましたけど、期待はずれですね」

俺はなかなかに知つてゐるけどな。もしかしたら高く売れるかもしないし。

「ISの事でわからない事があれば、まあ…泣いて頼まれたら教えてもよくつてよ。なんせ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

教官?それなら俺も倒したが…言わない方がいいか?

「教官なら俺も倒したぞ?」

一夏ア…てめえ余計な事を言いやがったな…

「は…? わ、私だけと聞きましたが?」

「女子だけってオチじゃないか?」

見事に俺の考えと一致したな、一夏。だが、なんか面倒事を起こした感があるんだが。

「つ、つまり、私だけではないと…?」

「いや、知らないけど」

「あ、あなた！　あなたはどうなんですかー！」

「あー、まあ、一応な？」

俺の場合は武装でビビッて戦意を喪失したって感じか？まあ、使わないで戦つたけどな。

他にも何か一人は言い合っていたが、チャイムが鳴り、渋々といった感じで引きさがつていった。

さて、始まつた三時間目。先生。怖いのでこっちをこらまないでください。悪気はなくとも怖いっす。

「それでは」この時間では実践で使用する各種装備の特性について説明する。　ああ、そうだ。その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

代表者？それなら代表候補生でいいんじゃないか？そして一夏、お前はサッパリわかつてないな。

そんな一夏に説明するかのように織斑先生は説明を続ける。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…まあ、クラス長だ。ちなみにクラス対抗戦では、入学時点での各クラスの実力を測るものだ。今の時点で大した差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まれば変更が

ないからかのつもつで

んじゃ、誰が推されるか見てみるかねえ… とか、候補生のビルギットで良いじやん。アイツ自分が呼ばれるのを当然つて顔してんぞ？

「はいっ… 織斑君を推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

あ、一夏が呼ばれた、これで俺は呼ばれずに…

「私は我道君を推薦します！」

「あ、私も我道君がいいと思います！」

お~い… 誰だよ俺のHISは歯止めが効かないんだぜ？ 下手したらあいつが怪我するかもしれないじゃないか。

「…では候補者は織斑一夏に我道藍…他にはいないか？ 自他推薦は問わないぞ？」

主にビルギットの方を見て先生は言つ、今さらこなつて『気がついたのか一夏が素つ頓狂な声を上げた。

「お、俺！？」

しかも立ちあがつて。お前…そこまでして立ちたいのか？いや、ここに居る時点ですでに立つては困るんだけどよ。

「織斑、席に着け。邪魔だ。…さて、他には居ないのか？ 居ない

なら織斑か我道、どちらかに

「待つてください！ 納得がいきませんわ！」

バンッ！と音を立てながらビルギットが立ち上がった。

「そのような演出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ 私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

なんつーか、オルコット？って凄く自尊心が高いんだな。まあ、気にするほどじゃないんだが。

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ 私はこのような島国までE-Sの修練に来ているのであって、サークスをする気は毛頭ございませんわ！」

…別に悪口言われんのは慣れでんだけさあ… それは人としてどうよ？… プライドが高すぎるのもあれだなあ…

「良いですか！？ クラス代表とは実力トップがなるべき、そしてそれは私ですわ！」

確かに、それも正論だろうよ。だけどなあ…

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけない」と身体、私にとっては耐えがたい苦痛で

「

悪いが、禁止ワードだ。

「イギリスだつて大したお国自慢ないだる。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「この国で暮らす事が苦痛だあ？ とんだわがまま娘だなおい、世界の中心は自分でまわつてるとでも思つてんのかあ？」

「なつ…！」

「真つ赤に顔を染めるオルコット。して一夏、それはある意味の自慢だ。

「あ、あ、あなたね！ 私の祖国を侮辱しますのー？」

「ならあんたはこの国にすむ人たちを侮辱してんだ、そんくらい分かれ鳥頭！」

「つ 決闘ですわ！」

またバシン！と机を叩くオルコット。関係ないが壊れそうだぞ？

「おへ、良こぜ。四の五の言つくり都合がいい

「その勝負乗つてやるよ、地獄つてモンを見せてやる

「言つておきますけど、あなた達、わざと負けたりしたら私の小間使い いえ、奴隸にしますわよ

「侮るなよ、勝負で手を抜くはずがないだろ

「それは俺のセツフだろ？が

本当に自信たっぷりだよな、オルコットって。

「そう？ 何にせよ丁度良い機会ですわ。イギリス代表候補生、この私、セシリ亞・オルコットの実力を示すまたない機会ですね！」

「わあ、一夏から怒氣が襲つてきてるよ…思つたり怖いな、おい。

「それで、ハンデほど程度つけねばよじこのかじり？」

「……いらぬよ、そんなもん

「いや、俺は一つだけもうひとつあるわ」

「藍ー？」

落ひ着け、一夏。「これはあいつを自重せねたための策だよ。

「ほら、後ろの誰かさんがさつ言つてますからあなたも一つだけ聞いてあげますわよ？」

「テメ…」

「落ち着けって、一夏。…俺がもうハンデは『攻撃をよけるな

だ

』は？」

クラス全員の声が揃つて間抜け声を出す。

「ああ、避けるな、といつても俺がやるのー発のみだ。それを耐えきつたらお前の勝ちだ」

「なー?…それでは私に負けると言つても同じじゅありませんかー?」

「ああ、かとこつてナイフでブスリつてわけじゃないぞ。俺がやるのは一発のみだ」

そういつた俺の言葉にクラスの女子はクスクスと笑い声を立てる。

「あら、この私を一撃で倒す自信が御有りのようだ?」

「ああ、急所も狙わねえよ。…一夏はハンデこらないんだよな?」

「あ、ああ。むしろこいつがつけてやりたいくらいだぜ」

強がらなくともこいつと思つゞ、俺は。まあ、お前の場合本心なんだろうけど。

「そんなもの不要ですわ!」

「これぞ売り言葉に買ひ言葉、つてか?」

「さて、話は纏まつたな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。織斑、我道、オルコットはそれぞれ用意しておくれよ。それでは授業を始める」

織斑先生の話でとりあえずはこの騒ぎは収まつたが、何所かパリピリした雰囲氣で授業が進んでいった。

準備は一週間。一夏と特訓でもするかねえ……

## 第三話（前書き）

戦闘シーンがかなり短いです。ご容赦を。

なんだかんだで決闘の日。

この日までに色々な事があつた。

少し内容を言えれば、一夏の鍵に1025とちやんと部屋が用意されていたのにも関わらず、俺の鍵に書かれていたのは倉庫の一文字だけだった。

その後はさつと部屋に入つて寂しさを紛らわせるために音楽をひたすらに聞いてた。

他にも色々あるのだが、時間が迫ってきてるので意識を現実に向けないとな。

「…んで、まだ一夏の専用機は届かねえのか？」

「やうだなあ……」

「そりゃ、エリに関わらず一週間は剣道をしてた、と

「やうだなあ……」

「…いい加減に現実に帰つてこ、俺もやうき帰つてきたばつかだが

「…ああ…でもよ、この状況じゃあな…」

まあ、そつなるだらうな。今ここはアリーナの待機スペースだもんな、不安にもなるだらう。

「ま、最初は俺が出るから、そんなに気にすんな。空氣をやわらげ

「おひかせへ

「だつたらさつと行つて來い馬鹿者」

ズドン！といつ音と共に姿を現す織斑先生。さつきの効果音は頭を殴られた音だ。

「ぐおおおおおおおお……わかりましたよ…今から行きますか」

さて、EWSを起動せんか。

頭の中でHISをつけた自分を思い描く。自身の周りに光がまとい、俺を囲む。

周りとは違うからちつとは驚くかな?

「さて、と。じゃあ先生、行つてきますよ」

「やつと行け。…いつおぐが、アレを直撃せぬなよ?」

「わかつてますよ。ちょっと脅かすだけですから」

気が進まないが、今日は直撃させないよ!とする。ホントは死んで死にはしないように出来るんだけど、一生もののトライアマにならうしなあ。

「んじゃ、いきますかね！」

とりあえず、最初に思つたんだが、人々すぐるだろ、これ。赤色や黄色のリボンも見えるし。

俺が出たときの反応は様々だった。

あるものは自身のエスと違う事に驚き、またあるものは自身の国への報告…恐らく戦闘データをとるつもりなのだろう。

これまた驚いたんだが、目を輝かせて見ているものが居たのだ。

「さて、逃げずに来ましたわね。その姿勢だけは褒めてあげますわ。  
…それがあなたの」

「ああ

白を基準としたトリコカラーの機体。全身装甲、何より目立つのは背中に付いているL字型の機械 実際はリフレクター だらう。

「これが俺のIIS、その名をガンダム…いや、GXっていうんだ。  
…それで、約束事は忘れてないよな?」

「ええ、…あなたの一撃を避けるな。耐えきれば私の勝ち。でしたわね?」

「ああ、防いでくれてもかまわない。どの道、俺は噛ませ犬だから

な

やじままで言つて試合…こや、演技を始める。無論、俺が負ける、な。

「さあ、構えとかないとやばいかもよ…サテライトシステム、起動」

そう呟くと、「字型のリフレクターが開きX字になり、背中にあつた巨大な砲身が肩に乗つかる。

「照準用レーザー、照射」

GXの胸から、レーザーが発射される。…少し前から思つている事だが、俺の中にある記憶とは少し発射までの手順が違うみたいだ。まず、本来ならば月が出ていないと使えないらしいのだが、どうやらこちらは電気が通つているものがあれば使えるらしい。この場で言えば、シールドに当つれば使えるらしい。

さらに、リフレクターに向かつて発信される何かを受信して撃てるようになるのだが、こちらではレーザーを介して回線を無理やり繋ぎ、そこからマイクロ波なるものを受け取つてエネルギーへと変換されるのだ。

つまり、電気が常に通つている物にレーザーを当つればあれは撃てるつてことだ。

『電流の流れを確認。マイクロ波へと変換開始。完了後Xへと送電します』

その間にもチャージは進んでいく。あ、みるみるオルコットの顔色が悪くなつていぐ。恐らく、警告表示が出でいるのだろう。

一方、その頃観戦していた一夏達はと笑つた。

「あれが、藍のHIS……」

一夏は純粋に驚き、

「あの馬鹿者、やつぱつあれを使つ氣なのか……」

千冬は呆れたように蘭を見ていた。

「あの、織斑先生、あれって？」

千冬の話を聞いていた篠がおずおずと千冬に聞く。

「…あいつは、サテライト・キャノンを使つ氣だ」

「「サテライトキャノン?」「

「ああ、衛星砲などでたらめのよつて思えるが、あれは本物だ。威力がケタ違はずぎる」

「ど、どのへりですか?」

篠の質問に千冬は少し考へ、

「…およそ30%でこの学園が吹き飛ぶな

想像したのだろう、二人は顔を真っ青に染める。

「まったく、衛星砲とはわらえんな。電気が通っている物にアレ（レーザー）を当てれば撃てるようになるなど恐怖以外の何物ではないな」

真剣な表情でモニターを見る三人。そこにはリフレクターと、体の側面を青白く発光させたXがいた。

「さて、檍梅はすんだか？ 覚悟じゅよ？」

「いや、ちゅうとー、これは洒落になりませんわよー…？」

今になつて喚きだしたか。まあ、どんな事を言われようが撃つことに変わりは無いのだが。

「この前言つた事を後悔するといこ…手遅れだがな」

少しだが青白くなつたりリフレクターと側面。およそ五%つてところか。引き金に力を込める。

「あ、あのー、この前の事は謝りますからどうか…」

「もうおめでたー！」

そして俺は引き金を引く…前に上に向かつて引き金を引いた。

爆音とともにビームが発射される。

当然、オルコットには当たらなかつたが、それでも結構近くにビームが通り、声にならない悲鳴を上げた。

ビームはシールドを容易く突き破り、空へと消えていった。

『……』

これには観衆の声もピタリとやんだ。まあ、しじつがないよな。強固なシールドが元から無かつたかのように抵抗もせずに突き抜けられたのだから。

さて、氣を取り直して声を出す。

「あーあ、はずしちまつたかー。ま、しょうがないか。これで賭けはお前の勝ちだ。おめでとう」

…ちやんと聞こえてんのか？…まあいいけれど。

「さて、負けたもんがここに居るのもあれだから、俺はそつと戻る事にするよ」

ま、一夏がフラグ立てるなり何なりするだろつからぞ。

ズドオオン！！

ピッヂに戻ってきた時にやつてきたのは織斑先生からの洗礼だった。IS解除してないのにこの痛み。流石つす。

「直撃させんなとはいつたが、あれはやつすきだ馬鹿者」

いや、でもしょうがないんですよ、あればまあ、ちょびっと驚かそうとしたけど、あそこまでビビるとは思わなかつたす。

「そもそもあいつが空中に居たから何も被害はなかつたが、もしも地上に居たらどうしたんだ?」

「あれです、あいつの方のアレを使つます」

「それもやつすさぎだ馬鹿者」

「こんなやり取りをしていいんだ、実際は一夏の戦闘を見てます。一夏のエリはまさしく白。純白と言つてもいいほど驚きの白さだ。オルコットの方はあれで頭が冷えたのか、冷静に闘いをしていた。

「あひやー、逆手に出来まつたかな?」

本来ならあのまま戦意喪失の中で棄権するか、それともやけになつて特攻するかと思つたが、そこは代表候補生だらう。頭が冷えたようだ。

当然、そんな状態のオルコットに一夏は勝てるはずもなく、逃げ回り、一次移行をしたが、轟戦空しつゝ、三十分くらいでおとされてしまつた。

これで代表はオルコットに決まりだな。まあ、最初からわかりきつてた結果だけ。

……おれ、出てきた意味あったのか?

## 第三話（後書き）

グタグタですいません。ここで少し補足を。

サテライトキヤノンは電流が流れているのなら撃てますが、かなりの電力が必要となります。

それ故に乾電池などでは電力が足りず、撃てないのです。

要するに、電力を垂れ流しているような場所じゃないと無理、みたいなものですね。

## 第四話

翌日。

教室に入った俺を待っていたのは女子からの怯えた視線だった。  
…ちょっと泣きたくなつた。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定ですね。あ、一繫がり  
でいい感じですね！」

S H R。

前では一夏が茫然としてた。まあそうだよな、俺もビックリして  
るわ。

「先生」

「何でしちゃか我道君？」

「何で一夏が代表になつたんだ？ 俺も一夏もビルギ… オルコット  
に負けましたよ？」

「それは私が辞退したからですわ！」

「ここになつて登場か、オルコット。…無理しなくていいぞ？」  
ち見てフルプル震えてんのを見てるとこちが可哀そつて思えてく  
るから。

「え、えつとですね… わ、私も大人げなかつた事を反省しましたの。

それで一夏さんにクラス代表を譲る事にしましたわ。IIS操縦には実践が何よりの糧です、クラス代表になれば闘いに事欠きませんからね

ふむふむ、なるほど。確かに一夏の戦闘センスには田を見張るものがあるしな。…恐らくだが、あいつは一夏に惚れたんだろう。なんとなくわかる。後篇の態度で判断した。

女子もわいわい言つてんな。何言つてんのかつるさくて聞こえないけど。

「なつ！ そんなのつて！？」

「一夏、諦めよづぜ？ 敗者は勝者に従つべきだ」

「お前もだらうづがー！」

なんてぐだらない」とを一夏と話してたんだが、

机をたたく音と共に幕が立ち上がった。  
バンツ！

「…あいにくだが、一夏の教官は足りてない。私が、直接頼まれたからな」

あれえ？俺の頭の中では、

一夏「藍、一緒に訓練しようづせ？」

俺「そうだな、男同士仲良くやるか」

第「いや、JUNは幼馴染の私がやるべがだ、部外者はすひんでいるとい」

一夏「え、ちよつと?」

第「やあ、行くぞ一夏!」

…的な感じだったんだが。あれ、俺の扱いがものすごく酷くていじけたたらのほほんとした少女に慰められた。あの優しさが懐かしい。

さて、俺が現実逃避している間にも議論は進んでいたらしい、が、織斑先生の一聲で場は収まった。あ、授業の用意しねえと。

一時間田後の休み時間。

俺と一夏は特にやることもなかつたので昨日の事について話していった。

「それにしてもさあ、あの一撃はず」かつたよなあ

「ああ…サテライトキャノンの事か。あれで五%だ」

「…お前を敵に回したくなかったよ」

「それより、お前方こそ凄かつたじゃねえか、候補生に二十分近く健闘してたじゃねえか

なんて、いややつちこひ、いやいややつちこひみたいな会話を繰り広げていたら、噂の一人がやってきた。

「少し、お話をよしんでしようか?」

あれ、この前より高圧的じゃ無くなっている?あのオルコットが?  
「なるほど、一夏田道しね…んじや、怖がられるから俺せどりつか行  
つてしまは」

「あ、あの我道さん」

「ん?」

「えつとですね、あの時は感情的になりすぎちゃってですね…えつと、  
その…すこませんでした!」

…あのオルコットが謝つただと…!?

第一印象が傲慢の我ままなお嬢様のオルコットが…?  
まあ、あれで何か思うところがあつたんだろ?。

「…おう、別に氣にしてなーが、謝つたからーことすみやば」

とりあえずあの場から退散する。なんとなくめんどくわいがつな事が起きそうだったし。主に一夏がらみで。

「やあやあがっくふ、相変わらず可哀そだね~」

窓側で呆けていた俺に声をかけてきたのはあの時の心優しい少女、

布仏本音だ。

「可哀そ「は余計だぜ？」見てみろよ、あれはあれで面倒事起こしてるぜ？」

「おーおー、オリムーも人気者だねえ」

…まあ、客観的に見たらそうだな。あの雰囲気を除けば。

「んで、何の用だ？」

「んとね～、あの決闘以来がっくんが怖がられてさみしい思いをしているのではないかな」と思つてきただよ～、あとね～、新しいがっくんのあだ名を思いついたんだ～」

なんとなく団星で泣けてくる。…それとなんかあだ名が嫌な予感しかしないんだが。

「とりあえず、聞いてやる」

「えっとね～あの一撃を見て思い浮かんだけどね～、ガトーツでどう?」

「俺は核を撃つていないし、帰還報告をしたわけでもない」

そんなわけでそのあだ名は拒否する。何時か誰から追いかけられるかもしれませんし。

「ほれ、もうすぐ授業が始まんど、席に就け」

「ん~、それじゃあがっくん、またね~」

あつちの騒動はまだ終わってないみたいだけど、後で織斑先生のアレを受ければいいだろう。  
さあ、授業の準備をすつか。

ついでに言えばあの後、俺にまで織斑先生の攻撃が及んだ。理不尽だ。

## 第四話（後書き）

文才の無さに全俺が涙した。

## 第五話

「これより、EISの基本的な飛行操縦を実践してもらひ。織斑、我道、オルゴット、試しに飛んでみせら」

四月下旬、そろそろこの学園にも慣れてきた。

一夏はラッキースケベを連発してたりした。相手もなかなかにまんざらでもなさそうだった。とりあえず一夏にサテライトキヤノンを撃ちこみたくなったのはしょうがないことだと思う。

これ以上回想を続けていると先生に殴られそつなので、EISを開する。

前回の決闘の時と全く変わらないトリコロールの機体。そして背中にはリフレクタと巨大な砲身。

「ひつー！」

…オルゴットさんよ、いい加減慣れてくれないか？流石に傷つくから。

こいつの目が光つただけでそんなに怖がるんじゃないよ。

「おい、我道、さつと飛べ」

ん、感傷に浸りすぎていたようだ。すでに一人は上空で待機していた。

「何をやっている、ブルー・ティアーズと白式では、スペックは白式の方が上だぞ」

…訂正、一夏はふらふらと上がっていた。兎に角急がないとな。

背中のバーストをぶかして上空へ。

「わりい、遅くなつた」

「大丈夫だぜ、俺も今さつき着いたところだし」

「だ、大丈夫ですわよーー?」

全然大丈夫に見えないっす。

「にしても、よく上手に飛べるな～」

「つても俺は普通に飛ぶイメージをしてるだけだぜ?」

「一夏さん、イメージでも構いませんが、自身にあつた方法を探した方が建設できでしょ?」

「なんか俺不遇じやないか?」この前の箇といい、オルコットといい。

「そう言われてもなあ…。大体、空を飛び感覚自体あやふやなんだよ。何で浮いているんだ。これ?」

「説明しても構いませんが、長いですわよ? 反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「わかつた。説明しなくていい

良くいった一夏、あのままだと俺まで巻き込まれていただろうからな。

「あの、一夏さん、ようしければまた放課後に指導して差し上げますわ。その時は一人きりで…」

『一夏！ いつまでそんなとこひに面るー。早く降りてここー。』

暇だつたから下を見ていたら篠が山田先生のインカムを奪つて叫んだ。

あ、織斑先生に叩かれてらあ。

『織斑、我道、オルコット。急降下と完全停止をやつて見せろ。目標は地上から十センチだ』

「了解です。では、お先に」

最初はオルコット。危なげなく完全停止を行つ。

「…流石は候補生だな。扱いが上手い。…んじゃ、次は俺が行くから良くな見ておくよーにー。」

リフレクタ を後ろ向きに開き、受光部からエネルギーを放出させる。

勢いよく地上に向かつて進むX。地上がはつきりと確認出来たころから体制を整える準備をし、一気に体制を逆にする。

「…ふむ、三十五センチか。まだまだだな」

流石は手厳しい織斑先生。容赦がないつす。  
さて、一夏は…

ズドオオオオオオオンーー！

清々しいほどに勢いよく墜落した。

どんだけ勢いあるんだよ、クレーター作ってんじゃねえか。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろといった。グラウンドに穴をあけてどりつする」

「……すみません」

その後、一夏を心配し、様子を見に来たオルゴシトに幕が突っかかる。

いつも思うが、よくそんなに言ひ合ひて飽きないな。いつものオチが来るのを忘れてないか？

「おこ、馬鹿者ども、邪魔だ。隅っこでやつてこい」

やつぱり怒られたな。見てて飽きないから何もしないけど。

「織斑、武装を開けろ。それくらいは自在にできるよつになつただろつ」

「は、はあ」

「返事ははい、だ」

「は、はい」

「よし、では始めり」

何だろ？、いつ見ていると漫才にしか見えないのは。

それはともかく、一夏は右手を前に突き出して、その手首を左手でつかむ。

右手へ光があふれだす。

… じう見ていると、あれだな、厨二病みてえ、って思つちまつのは悪くないと思うんだ。

まあ、置いといて、光が收まるところには一振りの刀、.. 雪片式型が現れた。

「遅い。 0・5秒で出せるようになれ」

うわ、一週間の訓練の結果が一瞬にして意味を持たなくなつた。

「次。 我道、展開しろ」

「了解です」

俺は自身の右手に意識を集中させる。描くのは銃。攻防一体のライフルを思い描く。  
光が收まり、ずつしりとした重みが右手にかかる。出したのはシリードバスターライフルだ。

「ふむ、まあまだな、お前は0・4秒で出せるようになれ」

さつきから俺の評価が微妙だけど気にしない。じゃないと心が持たないからな。

「最後だ、オルコット、展開しろ」

「はい」

オルコットは光を垂れ流すに一瞬で銃…スターライト…を開いた、が

「ほう、いい度胸じゃないか、代表候補生。私に向かつて銃を向けるとは」

「どういうわけか織斑先生に銃を向けてた。…オルコット、何もそこまで死に急がなくても…」

「い、いえ、これは私のイメージをまとめるために必要な…」

「なるほど、イメージをするたびに私を撃つ氣でいたのか」

「い、いえ、ですか…」

ドンドン墓穴を掘つていくな、オルコット。  
必死の説明が通じたのか、織斑先生は納得した。恐らく、オルコットも癖を直すだろう。

「オルコット、近接武装を展開しろ」

「えつ、あつ、はつ、はつ…」

先ほどまでの一步間違えたら死へ直行の会話を乗り切つて安心してたオルコットに追撃がかかる。  
なんか焦っていたけどなにか問題があるのでうづか?

「くつ…」

「まだか？」

「す、すぐです。…………ああ、もうひー！ インターセプター！」

…ヤケクソだな、オルコットも。まあ、あいつの事だからどうせ接近されなければ平気みたいなことを考えて、ひくに近接武器の展開の練習をしていなかつたのだろう。

「……何秒かかっている。お前は実戦でも相手に待つてもらうのか？」

「じ、実践では近接の間合いに入らせませんー。ですから、問題ありませんわー！」

「ほう、先の戦闘では初心者である織斑にも懐を許していたよう見えたが？」

「あ、あれは、その…」

諦めな、オルコット。今日まついてない日だと思えばいいや。

「…時間だな、今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを出づけておけよ」

まあ、後始末はさせるよな。…にしても、オルコットや篝はいついつ時に限つて見捨てるのか？

…頑張れ、一夏。俺はお前に同情するよ。手伝いはしないけど。

## 第五話（後書き）

勢い余つてまた投稿。  
また書きなおすかもしれませぬ。

## 第六話（前書き）

書いている途中で我道の扱いどうつか本気で考えてしました。  
これでもまだマシになつた方かと。

## 第六話

「というわけでっ！ 織斑君クラス代表決定おめでとう！」

『おめでとー！』

あちらこちらからパンパンとクラッカーの音が響く。場所は食堂。ちなみに俺はこのための準備で馬の様に働かされた。理不尽さに涙が出た。

慰めてくれた本音達三人組に感謝。

一夏の方を見てみると、嬉しいのか悲しいのかよくわかんない表情をしてた。

「…人気者だねえ、一夏は」

ちなみに俺の周りにはほんの数人しかいない。後は一夏の周り六割、他四割って所だな。

特にすることもないので適当にお菓子をつまむ。

こうして一夏を見ているとつづく天性のフラグメイカーだよなあ。

あ、箸がそっぽを向いた。

「はいはーい、新聞部です。話題の新入生、織斑一夏君に特別インタビューをしにきましたー！」

ん、一夏が新聞部の先輩にインタビューを受けてる。リボンの色でわかるけど、一年生じゃないのも混ざってるよな、jee。

「ちゅうといいかい？ 私は一年の薫蒸子つていうんだ。さつやくだけど話を聞かせてね～」

…二つの間でここまで来たんだ、先輩。そもそも見つかならないようここにこそ移動していたのに。  
しかも他にも生徒が集まってきたるし。

「…いいですか、よく俺を見つけましたね。見つかんないうにしてたの？」

「俺が見つけたんだ、お前つば人の多い所が苦手だったからな」

お前のせいか、一夏。その顔やめい、むかつぐぞ。

「さつやくですが、あの決闘の時すぐ退場した理由は？」

「ん、あれですか。あれはちゅうとした約束だつたんですよ。一発しか打たない。代わりに避けるなつて感じの」

「ほー、でもや、何で外したの？」

「そりゃあ、あれを当てたらさすがに拙いでしょうからね、二つもとじてはちょっとした仕返しみたいな感じで撃つたんですよ」

織斑先生にも止められてたし。あ、オルコットが思い出したのか顔を青ざめて震えてるが。

「なるほどねー、中々こ子供っぽい一面がある、と

「まあ、否定はしませんよ」

他にも一、二問質問に答えたりして、次に移るらしい。

「ふむふむ、中々にいい話が聞けたねー、それじゃ、次は写真ねー。  
ここは…織斑君とオルコットさんのツーショットかな。そしたら次  
は三人で」

俺は別に撮らなくてもいいと思うんだけどな。

俺の思いとは裏腹に黛先輩は着々と撮影の準備を始めてる。

「ほいほい、次は三人ねー」

オルコットと一夏が手をつないで写真を撮っている間、俺は簞が放つフレッシュヤーに耐えてなきやいけなかつた。冷や汗が止まんないぜ。

「それじゃあ撮るよー。我道君に最近つけられた名前は何?..」

そんなもんつけられてないんだけど。

「え? えつと……ガトー?..」

「残念! 一組の白い悪魔だつてや」

一夏、お前までなぜその名を知っているんだ。それよか悪魔って何だ?あの一撃がいけないのか?  
んな事を考えてたら不意に頭に体重がかかり…

シャッターが切られた。

「うおつー...?」

と共に前のめりに倒れる。急いで背後を確認してみたら、

「何で皆入ってるんだよ」

一組全員がカメラ内に写る範囲にいた。どうやら勢い余って俺にぶつかつたらしい。

謝ってくれたのでいいけど、写真には俺の顔は写らなきゃしねだ。

パーティは十時過ぎまで続いた。

俺は主に隅っこでお菓子を本音と食べ、のんびりしたり、こっちは来た一夏と適度に話をしてたな。

まあ、わかった事が、女子のエネルギーと結束力は凄いって事だ。クタクタの一夏に別れを告げて、自身の部屋へと戻る。

元が倉庫だったため、他の部屋よりかは広いけど、その分道のりが長いのが欠点だ。

そんなことを愚痴ついててもしょうがない。最近はこの道も短く感じられるようになつたし良いとするか。

また明日は一波乱ありそうな予感がする。主に一夏がらみで。

翌日。

「転校生？」

「そうそう、中国の候補生らしいよ」

朝、クラスに入ってきたときに聞こえたのは一夏とクラスの女子のそんな会話だった。

おはよー、と声をかけてくれるやつらに返事を返し、自分の席に向かう。

「よつー夏、何の話だ？」

「ん、ああ、藍か。実はな、中国から転校生が来るらしいんだ」

なるほど、昨日感じていた予感はこの事だったのか。

…しかし、外国に一夏の知り合いなんていたか？…わからん。

「あら、私の存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

今日の態度も偉そうだな、オルコシトよ。

…ん？何か違和感を感じるぞ？

「このクラスに来るわけではあるまい。騒ぐ必要はない」

…ああ、そうだー俺が近くにいるところのおびえていないんだ！慣れたのか、一夏しか見えていないのかよくわかんねえけどなんか嬉しいな。

「それよりも、来月はクラス対抗戦だろ？」

「そうですね、一夏さん！ 是非一夏さんに勝つてもらわないと。ですからより実戦的な訓練をするために、この私、セシリア・オルゴットが相手を努めさせていただきますわ」

俺という選択権はもとからないんだよなあ。一夏と練習しようとするどこからともなく一人がやってきて見た目はやんわりと、中身は強烈に反対してくるから、ろくに練習の結果をみてやれないとだよな。

でも俺なんて、基本一人で特訓だぜ？寂しいもんは寂しいんだ。

「男たるものなら勝つてみせろ一夏」

「一夏君が勝つとクラス皆が幸せだよ！」

「フリー・パスのためにも！」

為にもってかそれが目的だろ？に。本音も田を輝かせて言つてた気がするな。

優勝景品が半年デザート無料券だから、女子が執着するのも無理ないか。

「専用機を持つているのはうすら四組ぐらいだから楽勝だよ！」

「その情報、古いや」

『……！？』

声が聞こえた教室の入り口を見る。そこには強気に見える小柄な少女がドアにもたれかかっていた。

「一組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝で

きなこから

やる人がやるなり格好よく見えるだらつポーズを続ける少女。主に織斑先生とか似合にそつだな。  
でも、見るから、元

「似合わないよなあ……」

そんな小さなつぶやきは誰にも聞かれなかつたよつだ。

「鈴……？ お前、鈴か？」

「そつ、一組代表の中国代表候補生鳳鈴員。今日は宣戦布告に來た  
つてわけ」

ん？一夏はどういう事かあのツインテの少女の事を知つてゐるよ  
うだ。ここで聞くのもあれなんで、会話は最後まで聞くことにする。

「何格好付けてるんだ？ すげえ似合わないぞ」

「んなつ…………！？ なんてこと言つたのよ、アンタは！」

おつ、これが素か。こっちの方が見た目的には似合つた。  
つか、籌にオルコット、お前ら殺氣を抑えてくれ、近くにいる俺に  
被害が来てるから。

ん？…あれは…ああ、「愁傷さま、だな。

「おい」

「何よー！」

「バシンッ！」

「S H R の 時 間 だ、教 室 に 戻 れ」

「千、 千 冬 さ ん …」

「織 斑 先 生 と 呼 べ。わ た り さ と 戻 れ。そ し て 入 口 を 塞 ぐ ん。邪 魔 だ」

「す、 す い ま せ ん」

ふ む ふ む、 あ の 少 女 は 織 斑 先 生 と も 知 り 合 い な の か、 後 で 一 夏 に  
聞 い て み る と す る か。

「ま た 後 で 来 る か ら ね！ 逃 げ な い で よ 一 夏 ー！」

「そ う さ と 行 け」

「は、 は い ー」

あれ だ な、 チン ピ ラ が 放 つ よ う な 感 じ の 捨 て 言 葉 を い つ て そ う い っ て  
行 つ ち ま つ た。

「つ て か あ い つ、 代 表 候 补 生 だ つ た の か …。初 耳 だ ぞ」

「… 一 夏、 今 の は 誰 だ？ え ら く 親 し そ う だ つ た な？」

「い、 一 夏 さ ん ! ? あ の 子 と は ど じ つ こ う 関 係 で ! ?」

「織 斑 君 知 り 合 い の ー ! ?」

バシバシバシンッ！ズドン！

「席に着け、馬鹿ども」

さて、俺は席に着いていたのに叩かれたのは何故？しかも音が違つたし。

なんか恨まれるようなことしたつけなあ……俺……

## 第七話（前書き）

長い上に主人公がほぼ空氣状態。  
ご容赦を。

一度田なら、今度こそはと俺も思つ。

避けられなかつた惨劇に。

一度田なら、またもかと俺は呆れる。

避けられなかつた惨劇に。

三度田なら、呆れを越えて苦痛となる。

七度田を越えるとそろそろ止になる。

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわー！」

「…ま、お前のせいだな…」

「なんでだよ……」

なんでだよ、ってそりやお前、あの話のせいで織斑先生に七回も

あれでたたかれたんだぜ？

ちなみにオルコットと篝はそれぞれ注意五回、実力行使二回となつてゐる。

何もしていないのに俺の扱いが酷すぎる。

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とつあえず学食こじひき

「む……。まあ、まあお前がそういつのない、こいだらう」

「や、そりですわね。行つて差し上げな」ともなくつてよ」

見事なまでのツンデレだねえ。見てて一夏が羨ましく思えるよ。  
俺を含めクラスの数人が一夏の後をついて行く。一夏の両隣にはツンデレ二人組が。

さて、今日の昼飯は何にしようか。一夏は日替わりランチ、筈はきつねうどん、オルコットは洋食ランチにしていた。

俺はあんまり食う方ではないので、ホットドック三つにする。

「待つっていたわよ、一夏！」

あれは噂の転校生じゃないか。効果音でビーンなんて音が聞こえてきそうだ。

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

お、意外と素直なんだな。あの一人組だったりひょいくまい。

「のびるぞ」

「わ、わかってるわよ！ 大体、アンタを待つてたんでしょうが！ 何で早く来ないのよ！」

と思つたがこいつもそりうか。理不尽だなおい、一夏はエスパーか？

「それにしても久しぶりだな。ちよつと一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタ」ん、たまには怪我病気しなさいよ」

…「これまた凄い会話だな、一夏は癖のある子に好かれるのだろうか？」

「あー、「ゴホンゴホン！」

「ンンンッ！一夏さん？ 注文の品、出来てしましてよ？」

大変だな、あの二人も。これからも一夏を狙うやつらは増えると確信できるけど、諦めないつもりだろ？

「向こうのテーブルが空いてるな。行こうぜ」

おお、混雑しているはずの時間帯なのに空きがあるとは思わなかつたぞ。

いや、先輩方が気を利かしてくれたのかもしれないな。何にせよ、よく見つけたと褒めとこいつ、心の中で。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？ おばさん元気か？ いつ代表候補生になつたんだ？」

「質問ばつかしないでよ。アンタ」ん、なにエレフ使ってるのよ。ニュースで見た時びっくりしたじやない」

なんか一人だけで盛り上がりで盛り上がつてんなあ、あの一人の視線には気付いてないのだろうか？あれには恐ろしくて話しかける事も出来やしない。

「なあ一夏、その子とはそんな関係なんだ？」

「ねーねー、オリムーはその子と付き合つてゐるのかなー？」

俺と本音のダブル質問。周りのクラスメイトも興味津津のようだ。特に篠とオル「芝居」は返答を間違えたら殺すといわんばかりの目をしている。

「べ、べべ、別に私は付き合つてゐる訳じや……」

「そりだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染だよ」

「…………」

「？ 何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよつ！」

まあ、雰囲気からしてそりではないかとおもつていたけど、実際に知ると可哀想だな。

「幼馴染…？」

「あー、えつとだな。篠が引っ越していくのが小四の終わりだろ？ 鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。で、中一の終わりに国に帰つたんだ。藍と会つたのは中三の頭だから、丁度入れ違いになつ

たのか「

「…なんていうか、タイミングが悪いつーか、間が悪いつーか…」

呟いたらギロツつて睨まれた。地味に怖い。

「で、こっちは篠。ほら、前に話したろ？ 小学校からの幼馴染で、俺の通つてた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ」

じろじろと篠を見る鈴音。対抗するように見返す篠。二人の間に火花が散ったのを俺は見た。  
まあ、でも、しばらくは俺の出番はなさうなので、食事に専念するにしようかな。

「ンンンッ！ 私の存在を忘れてもらつては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」

「……誰？」

「なつ！？ わ、私はイギリス代表候補生、セシリ亞・オルコット  
でしてよ！？ まさか『存じないの？』

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なつ……！？」

うわ、どんどんオルコットの顔が赤くなってる。…ゆでダムみてえだな。

「い、い、言つておきますけど、私あなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦つたらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

まあ、代表候補生だから強いのは当たり前だりつ。俺戦つたことねえもん。あの時は俺の一方的な攻撃だったし、一発だつたし。

「…………」

「い、言つてくれますわね…………」

筈は箸を止め、オルコットは震えながら拳を握りしめた。二人から得体のしれない寒気があたりを襲う。他の女生徒が涙目になつてんぞ。

「一夏、アンタ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでな」

「ふーん…………」

おお、どんぶり持つてスープを飲んでやがる、セイジの男子よかよつぽど男らしいな。

「あ、あのせあ。工Uの操縦、見てあげてもいいけど？」

いいなあ、一夏は。俺なんて面倒を見てくれる相手がないんだぜ？

「そりゃ助か　」

ダンツ！机がほぼ同時に叩かれる。

あー、ついに一人が動き出すのか。

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

「あなたは一組でしょ」「？」 敵の施しは受けませんわ」

やつぱ一人は怖いな、背後に修羅が見えるぞ。

「あたしは一夏に言つてんの。関係ない人は引っ込んでよ

俺だな。もはや眼中にないもんな。

「か、関係ならあるぞ。私が一夏にどうしてもと頼まれているのだ」

「そうですか、お前の脳内ではそういうことになつてるんだな。

「一組の代表ですから、一組の人間が教えるのは当然ですわ。あなたこそ、後から出てきて何を図々しいことを

「

「後からじやないけどね。あたしの方が付き合いは長いんだし」

「そ、それを言つなら私の方が早いぞ！ それに、一夏は何度もうちで食事をして『いる間柄だ。付き合いはそれなりに深い』

「うひで食事？ それならあたしもそうだけど？」

へえ、一人ともそこまでの進展があったなら一夏も何かしら思うところがあるのではないか?と思うのだが…まあ、一夏はあれだからラッキーぐらいにしか思わなかつたんぢゃないんだろうか。

「いっ、一夏っ! どうこうことだ! ? 聞いてないぞ私は! 」

「私もですわ! 一夏さん、納得のいく説明を要求します! 」

「説明も何も……幼馴染で、よく鈴の実家の中華料理屋についてた関係だ」

ああ、なるほど。それで飯を食いに行つてたのか。ん? でも食費がかかりまくるんじゃないのか? つか、筈の家も何か飯屋を営んでいるのか?

見てわかるように凰はふてくされて、筈とオルゴットはほつとしてんな。

「な、何? 店なのか?」

「あら、そうでしたの。お店なら別に不自然な」とは何一つありませんわね」

しつかし周りの女子も災難だよな。俺はもう慣れたけど。

「親父さん、元気にしてるか? まあ、あの人こそ病氣と無縁だよな」

「あ……。うん、元気 だと思つ」

ありや、少し表情が暗くなつたな。まあ、家庭の事情に踏み込ん

じゃ拙いだらうからいわないけど。

「ん、それよりもさ、今日の放課後って時間ある? あるよね。久しぶりだし、どこか行こうよ。ほり、駅前のファミレスとかで」

「あー、あそこ去年つぶれただぞ」

懐かしいな、あそこはよく一夏と弾の三人で行ったもんだ。

「そ、そり……なんだ。じゃ、じゃあさ、学食でもいいから。積もある話もあるでしょ?」

さて、飯も食い終わったことだし、俺は教室に戻るところかね。

「　　あいにくだが、一夏は私との特訓をするのだ。放課後は埋まっている」

…と、思ったけど、またしても険悪な雰囲気が流れ始め、立つに立てなくなっちまった。

「そうですね。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですもの。特に私は専用機持ちですから? ええ、一夏さんの訓練には欠かせない存在なのです」

おい、それをいうなら俺も専用機を持つんで、俺は必要ないのかよ。

「じゃあ、それが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、一夏!」

つゆを飲み干して、そのまま去っていく凰。この空気の中颯爽と去つていくのは素直にすげえと思った。今度その度胸はどこから来るのか聞いてみようかな。

「一夏、当然特訓が優先だぞ」

「一夏さん、私たちの有意義な時間も使っていりといつ事実をお忘れなく」

結局、教室に帰れるよつになつたのは、四人の話が終わつてからだつた。

## 第七話（後書き）

原作道理に進めたら最長になつた。  
次回は少しば戦闘シーンに入るかも知れませぬ。

## 第八話（前書き）

前回の主人公の扱いについて反省。  
反省をいかし、今回からの扱いには注意します。

## 第八話

「なあ、藍

「？」

「ちふ……織斑先生の授業でまもつとしつかりしてた方がいいぞ？」

「ん？ 別にしつかりしてるつもりなんだけど」

「いや、まだ一田中せーつとして注意も受けたじゃねえか」

「本当にすわ、私たちいつも心こころあはず、的な感じでしたわよ

？」

今は放課後。第三アリーナへ向かっている途中だ。  
一夏がオル「シトヒ幕に頼み込み、俺も一緒に特訓する」とことが出来るようになつた。

「でもさ、ちゃんとノートはとめてたはずだぜ

「訳わかんない文字で書いてわかるのかよ」

マジでか。しつかりしてるつもりだったんだけどなあ。これでの理不尽だと思っていた仕打ちにも理由があつた事が判明した。自分では大丈夫だと思っていても周囲から見たら異常だったのが、今日の俺は。

「山田先生なんて泣きかけてたぞ」

「しかし…我道さんがあれほどまで呆けるとは思いませんでしたわ。  
…まさか、男色?」

「それは絶対ないからー。」

ほら、オルゴジトの余計なひと言で周りがこいつ見て話してんじ  
やねえか!断じて俺にはそっちの趣味はない…はず。きっと。

「え?」

そういうしているうちに入口に着いたようだ。一夏が間抜けな声  
をあげたのでその方向を見てみる。

「な、なんだその顔は…おかしいか?」

「いや、その、おかしいっていうか」

「驚いたつづーか」

「篠ノ之さん!? ビ、ビうしくて居ますのー?」

「いや、その言い方は失礼だろ」

居たのはHIS『打鉄』を開いた筈だった。ちなみに俺は基本苗  
字で呼ぶが、筈は篠ノ之より篠の方がいいらしいので、そう呼んで

いる。何か嫌なことでもあったのだろうか。まあ、それは置いておこう。

打鉄は攻撃よりも防御に優れていて、初心者にも扱いやすいのが特徴だ。E.S学園でも多く使用されている。

「どうしてみなにも、一夏に頼まれたからだ」

篝は近接格闘を担当し、オルコットは遠距離、俺は両方と話し合いで決まった。

少し前までは特訓に参加出来なかつたけど、一夏の説得により、参加出来るよつになつた。

まあ、オルコット達も一夏が強くなるのは好ましい事だらう。それに、毎の一件も影響しているのだろうが。

「くつ……。まさかこんなにあつさうと訓練機の使用許可が下りるだなんて……」

それには驚いた。普通なら、何枚も書類を書いてようやく許可が下りるといつて、篝は俺らよりも早くこにきて待つていたことから、かなりの速度で書類を全部書いたといつてになるんだろう。

「では一夏、はじめるよつ。刀を抜け」

実体剣が時々いになつて思つ時がある。俺のはほほゲーム系だからな。

「では 参るよー」

さて、一人のお手並み拝見と行こうかな。

「御待ちなさい！一夏さんのお相手をするのはこの私、セシリア・オルコットでしてよー。」

「いや、順番でやれよ」

聞く耳持たずかよ。つか、一夏の特訓じゃないのかよ。

「ええい、邪魔な！ならば斬る！」

「訓練機」ときに後れを取るほど、優しくはなくついてよー。」

二人の戦闘が始まった。先に篠が袈裟斬りを繰り出す。オルコットが展開していた実体剣を使い、受け流す。そして距離をとり、片手に持っていた銃で撃つ。

…この場合は、俺が一夏の相手をすればいいのか？

「一夏、やるか？」

「お、おひ。ちょっと離れてやるか

右手首にある銀のブレスレットが俺のエリザ。展開し、一夏と向き合へ。

「威圧感あるよな、藍のエリザ

「ま、全身装甲だからな んじゃ、行くぜー。」

一夏さんの手にある雪丘型をまつすぐ構える。俺はライフルをシールドに変形させ、片手はサテライトキャノン基部にいつでも手が届くように構える。

そして互いに接近し

「一夏ー。」

「何勝手に特訓しますのー!？」

「うえつー? 勝手にって…お前らが一人で戦つてゐから藍とひやつてただけだよ! それに、どっちかに味方したらお前ら怒るだろ?」

「当然だ!」

「当然ですわー!」

一人に止められた。しかし、訓練機で専用機とほぼ互角に打ち合ひつて、どんな腕してんだ篠は。

「仕方ねえ…オルコットー。」の際、あの時のケリをつけよつぜー。」

「む…いいでしょー! あの時の屈辱、今返させていただきますわー!」

「…つーわけだ。一夏、篠の方は任せたぜ」

「おい、ちよつとまー!」

こんな感じで、オルコットとの戦闘が始まった。

一番の可能性ゼロツトから放たれるレーザー、怯んだところに本命のライフルを打ち込むといったところかな。まあ、でも代表候補生なんだ、全部の行動に油断はできない。なら、やることは

「行動をさせなきゃいいだけだ！」

リフレクターを後ろ向きに開き、エネルギーを放射する。そもそも、俺のISには、エネルギー消費が激しいものばかりだから、長期戦は不利というものだ。

「やらせませんわ！」

四つのビットからレーザーが放たれ、こちらへ向かってくる。一つずつなら簡単に対処は出来るが、同時に四つはかなりつらい。シールドで一発を防ぎ、二発は最小の動きで回避し、接近する。

「まだまだですわ！」

ビットの攻撃速度が徐々に上がっていく。速度は変わらないが、目に見えて、隙がなくなっていく。

「乱れ撃ちますわ！」

おいおい、ビット四つでどんだけ弾幕を張つてんだよ、あり得ねえだろ。だが、このままだと勝てねえぞ。盾をライフルに変形させる隙もありやしないし、接近も出来ない。

「お、おいセシリ亞！　こっちにまで飛んできてるぞ！　つか篠！」  
「この状態でも攻撃を続けるな！」

よく見れば周りにも被害が出ているようだ。一夏なんて流れ弾プラス篠の猛攻だからな。仕方ない、腹をくくるか。

「ねいあー。」

弾幕に被弾する「J」とも構わずにオルコッシュに向かつ。「J」の程度の衝撃で、俺は止められない！

「なつーー？」

よし、予想通り怯んだな。ビットの操作中は動けないと判断した。そして「J」の一瞬の隙、見逃さしない！

「へいええー！」

距離を詰め、サテライト・キヤノン基部に設置されている高出力ビームサーベルを引き抜く。X字のようにエネルギーが放出され、緑色の刃が形成される。

そのまま真横にサーベルを振るう。

「あやつー。」

オルコッシュは可愛らしげ悲鳴を上げ、絶対防御が発動し、敗北となつた。

これで事実上はクラスで一番俺が強いことになるのか？

「さて、と」

オルコッシュには一言いわないとな。

「おい、オルコッシュ。勝負に熱くなんのは良いけどよ、あつとせ周りの事も考えよつぜ？。」

「う……私としたことが、少し熱くなってしまったわ

「こや、ちゅうとビリがじやねえだろ」

本気だったりじるんだ。知りたくないけどな。

「すげえなー一人とも。俺ももつと強くなんなきやな」

いつの間にか簫との試合を終えた一夏がやつてきた。簫のエヒは健在のようだ。となるとこつたん中止にしたと判断するべきか。

「あひ、もとからのつめつじよへ

「もうだぜ一夏。メインはお前なんだからお前を強化する方にせってんじやないか」

幸いなことに、オルゴットも俺も体力はあふれてるからな。

「げ……もしかして俺、墓[六掘つた?]

「ま、お前がそういうんだだから、練習を厳しくした方がいいんじゃないのか?」

「そうですね。私としても腕がなりますわ

一夏、逃げようとしてももう遅いぜ?お前の後ろには簫が構えているからな。

「く……くや。俺はここまでなのか…」

何を言っているんだー夏、ただの特訓だ。死を覚悟しなくてもいいんだぜ。

今日のアリーナでは、暫く少年の叫び声が絶えなかつた。

## 第九話（前書き）

遅れて申し訳ありませんでした。

## 第九話

「では、今日はこのあたりで終わることにしましょう」

「……」

さて、今日の訓練はここまでだな、一夏が返事もしない。まあ、三人の攻撃を避けまくついたもんな。そもそも、ここまで耐えられた一夏は凄いやつだろ？。俺は結構息切れしてるので、一夏程じゃないからすぐ元通りになるだろう。

「ふん、鍛えていないからそうなるのだ」

「こやこや、じめでやれたんだから少しは褒めてやるわ〜。」

お前らは前から持久力とかいろいろ鍛えていると思うけど、俺ら男子一人組はこんなことになるとは思わなかつたから何もしないんだぜ？

「…もう少しでも優しくしてやれば一夏の気が向くんじゃねえのかと思つんだけだな…」

「ほんと弦いたその一帯まで聞いたからして…」

「なるほど…よ、よしー。一夏、私がお前をピッドまで連れてってやる、感謝しろー。」

返事がない、ただの屍のようだ。

お前の精一杯の優しさなのか。

「へ、そつかー、お前がそこいつならば、わ、私が連れて行つてやるー。」

「おい、一夏は返事してねえぞ…っておい、早速さるだろアレ」

田にじもとまらぬ速さで一夏を抱きあげたかと思うと、次の瞬間に走り出しだ。あまりの行動の速さに、残された俺とオルコットは少し茫然としてしまった。

「…お前は行かなくて良かつたのか？」

「あなたが何を言つていたのかわかりませんし、今から行つてもどうしようもないと思ひますので」

まあ、そりゃあそうだらうな。

「ですでのー、あなたがちゃんとあの一人を監視するのです！ よろしくて？」

「よろしくねえよ、自分でやれよ」

扱いが雑かもしれないけど、疲れているから仕方ない。

「いいですかー、ちゃんと一人の関係が進まないようになりますよー。」

「それ今だけじゃねえし、難易度上がつてんぞー。」

セウハツヒセシコアセタハセト一夏達とは別のペラドへ戻つてこつた。

「…面倒くせえな」

ま、愚痴つても過ぎた事はしじうがない、どうせ戻るんだから、見るだけ見てわざと戻るとするか。

「アンタねえ……久しぶりに会つた幼馴染なんだから、色々と言つことがあるでしちうが」

「ん？」の声は転校生か？

スライドドアが開くと、一夏と篠、そして凰の三人がいた。一夏の体力の回復力すげえな。

「ん、ああ藍か、お疲れさん」

「おう一夏。お前も頑張ったな」

「ん？ アンタ、昼の時の…」

ああ、そういうや面白紹介してなかつたな。いや、一夏が説明してたか？まあいい。

「はじめまして、だな？ 僕は我道、我道藍だ」

「ん、わかつへると思つたび、アタシは鳳鈴音よ、鈴でいいわ」

「ああ、みんな頼むば、鈴」

正直言へば、今のところ一夏に恋してゐる少女たち（三人）の中では一番好感が持てる。正直、応援したいと思つてらうだな。

「それで、さつきの話の続きをだけ、たとえば」

「あー、『ホン』『ホン』」

明りかに話をやられてしまひにな、筈。

「一夏、私は先に帰る。シャワーの件だが、先に使つていいく」

「おお、そりやありがたい

「やつぱお前は気付かないのな…」

「？」

「？」

「じゃねえよ、横見てみるよ、横。

「では、また後でな。一夏」

よくもまああんな」と言つて澄ました顔で出ていけぬな、俺だつたらそんな芸当出来ないぞ。

「……一夏、今のどひつじとへ。」

はたから見てる分にはこいけど、これ自分に置き換えると絶対に気まずくなるよな、ま、一夏だからそんなことわからんと思つが。

「ん? こや、こつもはシャワーは簞が先なんだが、今日は汗だから順番を変わってくれつて頼んで」

「しゃ、しゃ、シャワー?『こつも』? い、一夏、アンタあの子とどひつじの関係なのよ?」

「どひつじ……前に言つたる。幼馴染だよ」

「お、お、幼馴染とシャワーの順番と何の関係があんのよ?」

「俺、今簞と同じ部屋なんだよ」

「……は? ハイシとじやなく?」

「ああ、俺たちの入学ってかなり特殊な事だったから、別の部屋が用意できなかつたんだと。んで、藍は倉庫、俺は一人部屋で過ごしてるんだ」

「俺と一夏が一緒じゃないのはあれか? あの一件があつたからなのか?」

「ああ、それもあるかもな。こじても、あの時はほんとに焦つたな。だって」

「勝手に一人の世界に入つてんじゃない！」

ん、あの件を思い出したらすっかり鈴の存在を忘れてた。すまない。

「それで、アンタはあの子と寝食を共にしてるって事？」

「ああ。まあ、篠で助かつたよ。見ず知らずの相手だつたら緊張して寝不足になつちまうからな」

「同感。初対面だと質問攻めされる氣もあるし」

「……」

「うん？ どうした？」

「……つたり、いいわけね……」

「？」

「うつ見てると中々に面白く圖だ。まるで兄が妹に気遣つてるように見える。身長的に。」

「だからー。幼馴染ならいいわけねー！？」

「うおーー！ 友人でも構わないとー？」

「わかった。わかったわ。ええ、ええ、よくわかりましたとも」

ふむ、さつきよつは少し気分が良くなつてる気がするな。

「一夏っー。」

「お、おひ

「幼馴染は一人いるつて」と、覚えておきなさいよ

「別に忘れてないが……」

「じゃあ、後でねー。」

さつき鈴がいつた後でが気になるな。一夏に言つといた方がいい  
か?

「一夏

「ん?」

「気をつけよ、何が起るかわからねえからな」

「?」

わかつてないか…まあ、いいか。俺が関わることでもないし。  
そうと決まればさつと帰るか。俺もゆっくりしたいし。

「ンンン、ヒヂアが呑かれる。

こんな時間にここにやつてくるのは一人だけしか居ない。作業を途中でやめて向かう。

「また来たのか？　ここには何もなこと何度も言つたらわかるんだ？」

「えへ、だつて、お菓子は一人で食べるより一人で食べる方がおいしいじやん！」

「部屋のやつらと食えよ」

「だつて、皆ダイエットダイエット言つて食べよつとしないんだもん」

田の前にいるのはお菓子を大量に持つてきているブカブカのパジヤマ？を着てている女子…言つまでもなく、本音だ。

「はあ…別にいいけど…食つたら帰れよ」

「わーい、やつたー！　がっくんとお菓子ーー！」

声でけえよ！変な噂がまた立つかも知れねえじゃねえか。ただでさえオルコットには男色疑惑をかけられてるんだし。

「あれ？　何か直してる途中だったの？」

「ん？　ああ、最近見つけたんだけどよ、いろんなところに穴があ

いてるんだが、縫えば使えるからな、直してるんだ」

「ほえ～、やっぱがつくて手先器用だよね～」

そう言いながら本音は部屋を見渡す。ここにきてから俺が修理したものが置かれている。小さいものはおもちゃから、大きいものはブラウン管テレビまで。織斑先生にはあきれられたけど、癖だからじょうがない。

「ねね、終わるまで見てていい?」

「構わないぜ… つておい馬鹿やめろ集中出来ねえつづーの、わっかと背中からじこてくれ」

「え～、何で～？」

「わかつててやつてるよなー。」

背中に柔らかな感触が。そういう風に見かけによらず大きいんだよな。…何かとは言わないけど。

「えへへ～、がつくんのえつち～」

やつてんのはお前だけどな！落ち着け、落ち着くんだ我道。冷静になるんだ。そして明鏡止水の境地へとたどり着くんだ、我道。そういうしてじゅううちに時間は過ぎていき、いつの間にか服は完成していたようだ。

「で、出来た…」

「ああ～！ 漆こよがっくん！ 優美上げる～！」

本音はどうからかマシコマロの袋を出して俺に渡してきた。いや、嬉しいんだけどさ、とにかく背中から退いてくれませんかね。

「お～い、藍、入るぞー」

え、マジ？ このタイミングでお前はこいつらのなか？

「おー、本音はなれり、一夏が来た」

「ん～… やだ…」

お前眠いんだろ！ わたしと寝ようよ… ついで寝よつとするなん！

「なあ、我道。ちょっと話したいんだけどさ…… ああ、俺は向もみてないからな、気にしないでくれ、いい夢を」

状況整理。

本音、はなれたはいいが、ベットで熟睡。

俺、ベットの前。

一夏、一人の姿を確認、空気を読む。

うし、把握した。

.....

「待て、一夏！ 俺はお前の考えた様な事はしないし、しようとも考えない！」

「気にするな藍！　俺はお前の事を軽蔑なんかしないからなー。」

「だから違つー。」

何であいつこんなときだけ空氣読むんだよーしかも間違つた空氣の読み方！

追いかけようとしたときにはもう一夏の姿は見えなくなつていた。  
…どうすんのさ。とりあえずは本音を部屋に返さないとな。  
起こすか？いや、でもなんか可哀想だな…せつかく気持ちよさそうに寝てんだし。

かといつてこのままにしていたら織斑先生に地獄を見せられそうだ  
し…

「…仕方ないか」

俺は本音を起じやないよつて抱えながら、本音の本来の部屋へと進む。

道中、女子達がキヤーキヤー言つていていたが、予想の範疇だったので、何とかなつた。心に深い傷を負つたけど。

練習よりもこっちの方がよっぽど疲れたぜ。…もう早く寝たい。  
とりあえず、寝ながら考えたのは、明日の訓練で一夏に仕返しをしようつてことだけだった。

翌日、生徒玄関前廊下に張り出されていた紙があった。

内容は「クラス対抗戦日程表」。

どうやら一夏は一回戦で一組 鈴と戦うことになるらしい。  
これを見て俺が思ったことは、  
(これで一夏の特訓を厳しく出来るな… フフフ)  
そんな事だけだった。

## 第十話

とある日の放課後の一端。

「おい、逃げんな！」

「やだよー。つてか、別に俺何もしてないよなー！？」

「うでもしないと俺はやつてらんねえんだよー。」

「ただのやつあたりかよー。」

練習をしている生徒の中でもひと際激しい攻防を繰り広げているのは一夏と藍だった。

もともと、一方的に藍が攻撃をしているだけだが。

「ついで、簞笥セシリアもこの状況をなんとかしてくれよー。」

「何とかしてといわれましても…」

「今の状況では助けに入ることはできないぞ…」

「ここつでえー。」

「うわーー、ちよー、うわああああああー。」

俺のやつ当たりから数週間、来週からクラス対抗戦が始まる。一夏も少しは鍛えられた…と、思う。あの時は仕方なかつた、そうでもしないと恥ずかしさで死にたくなるからな。

「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されるから、実質訓練は今日で最後だな」

「んじゃ、しつかり復讐しなくちゃな

「…なんか、意味が違う気がするんだが…」

「気にしない、気にしない。

「HS操縦も少しば様になつてきたが、確かに復習は大事」

「確かに復習は大事ですわね。しかし、私が訓練に付き合つているんですもの。このくらいは出来て当然、出来ない方が不自然というのですわ」

「まあ、藍から逃げるのに必死だつたからな…」

遠い田をするな、遠い田を。しかし、最近になつてよひやく女子からの追求が少なくなってきた。つてか、そんな噂をものともせず、本音は部屋にやつてくるから噂が絶えなかつたのも一つの原因だな、おいがえせない自分が憎たらしい。

「ふん。確かに逃げるのには役に立つたかもしけんが、中距離射撃型の戦闘法が役に立つものか。第一、一夏のHSには射撃装備がない」

不思議だよな、剣一つで敵と闘うとか難易度が高すぎると思つ。まあ、俺やオルゴットみたいなチーム主体のHSには強いよな、白式つて。エネルギー無効化攻撃持つてるからこいつの攻撃のほとんどが消えちまつ。サテライトキャノンはどうなるのかわからぬけど。

「それを言つなら篠ノ之さんの剣術訓練だつて同じでしょ。HSを使用しない訓練なんて、時間の無駄ですわ」

「な、何を言つたか！ 剣の道はすなわち見といつ葉を知らぬのか。見とはすべての基本において」

「一夏さん、今日は昨日の無反動旋回のおわりから始めましょう」

「それより、実戦の途中途中で指示した方がよくないか？」

「確かにそちらの方がいいかもしませんね…では一夏さん、今日は私と」

「ええい、」のつ 聞け、一夏！』

「俺は聞いてるって！」

いつもと大して変わらない会話を楽しみながらアリーナのペッヂに到着。すると田の前にとある人物…ってか、鈴だった。

「待っていたわよ、一夏…」

まさかここで鈴に会うとは。一瞬にして雰囲気とオルコットの雰囲気が悪くなつた。お前たちはわかりあつ氣はないのか。

「貴様、どうやつて一夏…」

「一夏は関係者以外立ち入り禁止ですわよ…」

可哀想に、話を途中で切られるのつゝ中々にきつこよなあ。

「あたしは関係者よ。一夏関係者。だから問題なしね

「ほほう、どうこう関係かじつくり聞きたいものだな…」

「盗人猛々しいとはまさにこの事ですわね！」

女子が切れると怖いよな、男子だとあんまり怖くないのに。普段温厚な人が切れると怖いっていつけど、女子が切れても怖いよな。

「……おかしな事を考へてゐるだりつ、一夏」

「いえ、何も。人切り包丁に対する警報を発令しただけです」

「あ、確かに怒った簾の雰囲気ってそんな感じがするな、いいたとえだぜ、一夏」

「き、貴様たちは……！」

手に何も持っていないくても、その手に日本刀を持つてるよつに見えてしまつた。

「今はあたしの出番。あたしが主役なの。脇役はすつ込んでよ」中々にきつい言葉を浴びせるんだな、鈴つて。簾に通用するかわからんが。

「わ、脇やつ……？」

ほら、なんかもう噴火寸前の活火山みたいな状態になつたじゃないか、見てるこつちが怖いぞ。

「はいはい、話が進まないから後でね。……で、一夏。反省した?」

「へ? なにが?」

「だ、か、らつ! あたしを怒らせて申し訳なかつたなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょ? うがー」

「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじやねえか」

「あんたねえ……じやあ何、女の子が放つて置いてつて言つたら放

置するわけ！？

۱۷۰

なんかよくわかんないから会話に参加出来ねえけど、どうすりや  
いいんだ、これ。

「なんか変か？」

「変かって……ああ、もうっ！」謝りなさいよ！」

「だから、なんでだよ！」約束覚えてただろうが！」

「あつきた。まだそんな寝言言つてんのー? 約束の意味が違うのよ、意味がー。」

約束？意味？よくわからないので一夏に一番近い簞に聞いてみる。

「なあ、鈴の言うている約束つて何の事だ？」

「あの朴念仁が将来の約束をしたち、誓いを勘違いしたのだ」

将来の誓し？ああ、結婚にて事ね……にて結婚！？

何お前ら、結婚の約束してたの?」

一  
け、  
結婚の約束なんて……」

「何言つてんだ？」  
「俺はおじつでも、ひつて約束をしてもらつただ  
けだぞ？」

「……」

おひつても、何を？まあ、わかるのは一夏が勘違いした、か。  
可哀想だな、鈴も。

「ほんとこ、謝る氣はないのね？」

「だから、説明してくれりや謝るひつーのー。」

「せ、説明したくないからひつして来てるんだじょ！が！」

「せうだよな、恥ずかしいもんな」

「～～ツ！ アンタ！」

鈴が赤い顔してひつちをにひむけび全然怖くない。むしろ同情してしまひ。

「じゃあ、もうひつしましょ！つー。来週のクラス対抗戦、そこで勝つ方が負けた方に何でも一つひつ事を聞かせらるつてことついわね！？」

「おひ、いいぜ。俺が勝つたら説明してもひつからなー。」

「せ、説明は、その……」

「一夏、それは酷だぜ？」

「なんだよ藍、なんか知ってるのか？」

それは俺から言えないと、本人が言わなきゃ意味がないし。

「とにかく、謝る練習でもしどうなれど…」

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とはーー！の本念ーー！聞抜けーー！アホ！馬鹿はアンタよー！」

「うるせー、貧乳」

ドガアアアアアアン！

うわ、一夏が爆弾発言したから鈴が切れたじゃないか、しかも殴った場所の壁へこんでるし。

「い、言つたわね……。言つてはならなことを、言つたわね！」

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

「今の『は』！？ 今の『も』よ！ いつだってアンタが悪いのよー！」

「ちすがにそれは言つてさまだと…」

「アンタは黙つてー！」

「悪かつたよ。何も口出しこなことよ。

「ちよつとは手加減してあげよつかと思つたけど、どうやら死にた

いらっしゃいわね……。いいわよ、希望~~モチ~~ひつじしてあげる。全力で、叩きのめしてあげる」

そのまますたたとペラードを出していく鈴。残された俺たちは微妙な雰囲気~~ムード~~に。

とりあえずは試合の為に、一夏の氣を樂にしてやらなことな。

## 第十話（後書き）

指摘等あつましたらお願ひします。

## 第十一話（前書き）

お久しぶりです。

久々なので所々あやしいところがあると思います。

## 第十一話

『今回の目的は分かっているな?』

「ええ、彼の実力の確認ですね」

『その通りだ。が、なるべく早めに済ませることだ、我々の行動に  
あれば気が付く前に』

その言葉と共に通信が切れる。

そんなことは最初から承知している。彼がIFSを操りだしたのはつい  
最近だ。実力の確認するなど簡単にできる。  
…家族を傷つけるのは気が進まないけど、計画のためだ、やらせて  
もらひよ、藍。

さて、今日はクラス対抗戦初日、一夏と鈴の試合がある日だ。朝来てみたら行列が物凄くてかなりビビった。二人の噂は知ってるがここまでとはな‥。

ちなみに、俺は篠達とは別行動だ。あいつらはペッシュ、俺は観客席の最前列だ。

一夏の事は応援しているけど、こいつらものは両方の活躍を観たいしな。

さて、そろそろ試合が始まるみたいだ。

鈴の機体をみて印象的なのは肩附近にある非固定浮遊部位だな。アンロック・コネクター

…毎回思うんだが、何で俺の機体だけ全身装甲なんだろうな、シリードエネルギーがあるのに。いや、気にしてないし、気に言つてるから別にいいんだが。

『それでは両者、試合を開始してください』

ん、始まつたなと思つたらいきなり一人とも動きはじめやがつた。一夏も成長しているよな、初心者からあの一撃を防げるようになつたんだから。

…おつと、また鈴が動いた、といつよりは一夏が防戦一方になつてきてるな。

まあ、一夏は初心者だし、鈴は代表候補生だから、この差は当然と言えるかもしねりないな。

ん? 肩のアーマーが開いて中にあつた球が光つたと思つたら一夏が吹つ飛ばされた。

「なんだりや！？」

驚愕してゐる間にも鈴の攻撃は続く。なんだろうあれ、空気砲か？

周囲も困惑している顔が多い。

お、いつたん距離を置いたな。…一夏が何言つてんのか分からぬが、鈴が少し気圧された氣がする。

まあそれもわずかな時間で、再び武器を構える一人。  
…たぶんだけど、一夏はあの訳の分かんない一撃をもりつ前に接近して攻撃するつもりだろう。俺だつたらそうするな。  
そして一夏は瞬時加速(イグニッショングースト)を使い、鈴に接近する。

観客も沸き、試合も最高潮のこの瞬間、

爆音が鳴り響いた。

爆音の元凶はステージ中央にある煙の中にあるらしい。おい、どうすんだ、いまの衝撃で持つてたジュースが服にかかちまつたぞ。目を凝らして見ると煙の中になんだろう、人影かあれ？が見える。

『試合は中止、皆さんは落ち着いて待機してください』

スピーカーから聞こえてくる先生の言葉に耳を疑つた。待機？避難じゃなくてか？

「何これ！？ 扇が開かないわよ！？」

なるほど、だから待機つてことか。つてかあの子の発言は拙くないか？ほら、周りが焦りだした。

煙の中から出てきたのは俺と同じ全身装甲の濃い灰色の機体だった。

遠田で見ても分かるくらいあの機体は手が異様に長い。あんなに長い手が必要なのか？

……どうする？手助けに行くか、それとも脱出の手伝いをするべきか？

『おい、我道』

とど、話を聞いたりと黙つたら向こうからきた。……しかし、この様子だと全くこの事態に驚いてないみたいだな……さすが織斑先生。

『お前はまず生徒を避難させろ。終わり次第一夏達の支援に当たれ』

『……了解！この我道様に任せときな…』

なんとなく言つてみたけどびびつと恥ずかしい。  
気持ちを切り替えよつ……つし、やうとなればまずは扉を壊しこ……じ  
やない、開けにいくとするか！  
まずはHUTを起動つと…

アリーナ上空に熱源。所属不明のHUTと断定。ロックされています。

ん？っておこちつと待てよーいきなり撃つてくる馬鹿がいるか  
よーいこちには人がたくさんいるんだぞ！？何とかシールドに変形  
させて防げたけど！

『おいてめえ！ いきなり何してんだ！』

「…………」

当然ともいえるが、無視された。

近くで見るとよくわかる白亜の機体の姿。腕にもなんかついていて、アンテナが長い。田はどいかのロボットアニメの敵役で出てきそうなモノアイだ。

謎のI-Sはゅっくりと腕をこっちに向けて……「うおっ、ビーム！？」あのヘンテコな腕のパーティは武器だったのか！

「くわっ！」

シールドをライフルに変え、三発ほど撃つてみるが、駄目か、やっぱそう簡単に当たつてくれるわけねえよなあ……

「君、脱出しなさい！」これは先生が……きやつ！？

あ、打鉄を装着した先生に攻撃を始めやがったを……って観てる場合じゃねえ！

「お前の相手はこの俺だあ！」

サーべルを振りおろしながら一人の間に割つて入る。

「先生、大丈夫か？」

「え、ええ。だけど、エネルギーがこんなに削られるなんて……」

打鉄でもこんな風になるのか……だつたら……

『……なあ、織斑先生』

『どうした』

『こいつの相手、俺一人でやらしてくれないか?』

『……いいだろ?、生徒の事は先生達に任せるといい』

織斑先生は少し考えた後に返事を返してきた。

サンキュー、織斑先生。うし、これで許可ももらえたし、やれるだけやつてやる!

「我道君一人で大丈夫なんですか!? やっぱり他の先生も一緒にいた方がいいんじゃ…」

「先ほどの動きを見ただろう。あの動きについていけのか? それに、ついていけたとしてもあのI-Sの火力を知つただろう? 教師でもあのザマだ」

一夏と鈴、そして上空の藍が写っているモニターを観ながら千冬は続ける。

「それに、あいつの機体は火力、防御面共に優れている。少しの攻撃ではびくともしないのを知つているだろ?」

モニターでは互いが激しくぶつかりあつているが目に見えて不利な藍と、防戦一方の一夏達の姿がある。

「確かに、我道君の機体は高性能ですもんねえ……ゼリが作ったんで  
しょつか？」

「…………あんな機体を作ったといつ記録はゼリにもないがな……」

千冬の呟いた言葉は真耶には聞こえなかつたようすで、モニターを  
じこつと見つめていた。

「あー、我道君が優勢に…って、あれはなんじょつか？」

真耶がみているのは藍の方だった。そりで『』こたのは、謎の  
機体の周りに浮遊する謎の機械だった。

「おや、『ホルコット』の『ピット』と同様なものだね。……それで、これ  
をお前はどう乗り切る？』

くそつ、実力が違いますぎやー。

『』こつが頑丈じゃなかつたらどうくんに終わつてた！

「IJのやー。」

せつから『』の攻撃は当たんない、あつちの攻撃は当たる。  
つたぐ、諦めたくなつてくわ。

「けど、諦めねえ！」

「……や。」

よし！ライフルがまともに肩に当たった！このまま追撃を…ってなんだ？あいつの雰囲気が変わった気がする。

「……」

…あれはオルコットのビットみたいなモンか？…おいおい、あいつより数多いじゃねえか、倍はあるんじゃねえの？

つて、やべ、観てる場合じゃねえ！あの厄介さは経験済みだ、それにあの数を動かされたらいくら動いてなくてもこっちが動けなくなる！

「……」

まじかよ…こんな複雑な動き読めるわけねえだろ！

こんなノリだが、実際かなり追いつめられていて、かなりヤバい。今までずっとコイツ（GX）の堅さに頼つてばかりだつたから、危機感があまりもてなかつたけど…これから、いや、今からそれを改めないといけないな。

「負けてたまるかよ！」

織斑先生の仕置きも怖いが、何故かこいつには勝たなくちゃいけないという気持ちがあった。

大体人の動きを止めるのには、思いもよらない行動をとられた時だ。それがこいつに通用するとは思えないが、無人のIRSは作られてないはずなんだ、かける価値は十二分にある。

…よし、これでいけるここまで行くぜ。

あいつの攻撃を受け続けるのは仕方ない。リフレクターも破損が激しいと警告が出ている。あと少しだけいい、持つてくれ。

リフレクターを後ろに展開させ思い切りエネルギーを放出させる。

このゲームの雨の中突っ込んでくるとは予想になかったのか、ビームと動きが止まる。

この一瞬を逃してはいけない。周りの音が聞こえなくなるくらい俺は手に持っているビームライフルを謎のISHに向けて『投げた』この行動も予想外だったようでもまた動きを止め。動き始める前に次の行動へ。

今度は飛んでいるライフルに向かってビームサーベルを全力で『投げた』

サーベルはそのままライフルを貫き、相手の近くで爆発した。謎のISHがよろけた隙に何とか接近し、両肩をつかみ、逃がさないようにする。

そして俺は肩にあるバルカンを撃ち放つた。

数十発ほど撃ったところでビームと蹴りを腹にくらい、引き離される。

どうすればいい？俺のエネルギーは100を切つて。武器もない。対して相手は不明。圧倒的不利だ。

「……」

俺が相手に対しても危機感を覚えながら身構えていると動きがあった。腕を持ち上げ

「ハア？」

手を振ってきた。

謎の行動に戸惑っているとそいつは不意に後ろを向き、空へ消えていった。

「なんなんだよ一体……」

そう呟いたとたん、だんだん周りの音と疲労がやつてきた。  
敵を撃退したのは喜ばしい事なのに、疑問が残った。

「うだ、一夏達は！？」

「「一夏つー」」

蹴落とされたおかげで鈴の声まで聞こえた。ステージの方を向く  
とオルコットが手長IISに攻撃を仕掛け終わつたところだった。

「俺が心配する必要もなかつたかなあ…」

何故シールドが破壊されるのかわかんないけど、まあ、何はともあれこれにて一件落着……じゃねえ！あいつまだ動いてやがる！  
俺のエネルギーはおおよそ90%。ブースト一発が限界か。間に合え  
よ…！」

「ふう。何にしてもこれで終わ…我道さん！？」

途中でオルコットとすれ違うが、気にせずあのIISのもとに進む。  
一夏も気付いたのか俺と同じくらいの速度で突っ込む。

「「おおおおおおおおおおおつー」」

一夏へと向けられた左腕に俺は脚を叩きこみ軌道をそらす。スレ  
スレでビームを回避した一夏がその手に持つた雪片一一型でIISを切  
り裂いた。

謎のIISは完全に動きを止め、地へ伏せた。

俺たちはそれを確認した後、一人とも笑顔で拳をぶつけた。

## 第十一話（後書き）

ベルティゴ、上手く表現出来たのか不安です。  
何かありましたら教えていただけると幸いです。

## 第十一話（前書き）

久々に書いたのであいまいな所があると思います。  
ご指摘等、ありましたらお願いします。

## 第十一話

謎の機体を撃破＆撃退後の話。

あの後、一夏は気を失つてしまい、急いで保健室に運ばれた。ついでに俺も運ばれたんだが、俺は背中に軽い打撲で済んだ。あの猛攻を受けてこの程度とは、つぶづく機体に助けられちまつてるな俺。

さうに、俺の機体は戦闘に支障が起こらない程度の傷らしい。装甲堅過ぎるだろ。

一夏は全身打撲だそうだ。何でも鈴の最大出力の一発をもろにもらつたらしい。何があつたのさ。

今は湿布をもらって自室へ帰る途中だ。

……あー、そういうや武装、ほぼ壊し…壊れちまつたんだよなあ…一応、武装の確認はしておくか…

『シールドバスター・ライフル	破損
大型ビームソード	破損
サテライトキヤノン	破損
リフレクター	破損
ショルダーバルカン	損傷
ブレーストバルカン	異常なし』

…………これは酷い。

まともに使えるのバルカンだけか。バルカンだけでどうしようと。  
…ん? これは…

『特定の条件を達成。機体情報更新中…』

特定の条件?なんだろう、武器の破損?それとも…あいつと戦つたからか?

あり得ない…って事は無いんだよな、そもそもコイツ自身があり得ない物なんだから。

こいつの装甲、今の技術じゃ作るのは馬鹿みたいに金と時間がかかるらしい。

…いや、それ以前におかしいのは何故『IISが発表される前から』  
『いつは俺のそばにいたのか?』って事だよな。  
あの時、一夏と共に迷い込んだ場所で、あいつがIISに触れた時、  
こいつも共鳴するように展開されたんだよな。  
そして、流れのままここへ…って感じなんだよな。

「ん? あれは…」

俺の部屋の前に人影。いつもと変わらないダボダボの制服、眠そ  
うな目。間違いない、あいつだ。

「…お前は何人の部屋の前で寝かけてるんだ」

立つたまま寝るつてある意味で見てみたいけどな。

「ん? …おお、がっくん。来るのが遅すぎて眠くなつつけつ  
たよ~」

「俺は待たせてないけどな」

「つれないねえ~、…あれ? そういうやつかんちやんどう~?..」

「俺が見た時にはお前一人しかいなかつたぞ」

「えへへ～、やつぱ帰つちやつたのかな～、じゃあ私も帰るね～、  
ばいば～い」

「エヘン」と裾の中から取り出したのはお菓子の袋だった。…「…」  
から取り出してんだお前は…そもそも何しに来たんだよ。  
いや、しかしあいつもよくあんなゆっくり歩いていけるよな。一  
夏がのほほんさんとこうのも頷ける。

とりあえず、今日はもう休もう。んで、この更新が終わるのを待  
つてみるかな。

学園の地下50メートル。機能停止したHSはそこへ運び込まれ、  
解析が始まっている。

千冬は今日の一つの戦闘映像を無表情で繰り返し見ていた。

「織斑先生？」

「ウインドウが開く。ディスプレイに割り込んできたのは真耶だっ  
た。」

「どうぞ」

ドアが開くと、普段の動きよりも数倍びきびした動きで真耶が入室した。

「例のIISの解析結果が出ましたよ」

「ああ、どうだつた?」

「はい。あれは 無人機です」

世界中で開発されているIIS。その中の完成されてない技術。リモート・コントロール・ネットワーキング遠隔操作リモート・コントロール・アローンと独立稼働。そのどちらか、あるいは両方の技術が使われていると言つことだ。

「どのような方法で動いていたかは不明です。織斑くんの攻撃で機能中枢が焼き切れていきました。修復も、おそらく無理かと」

「コアはどうだった?」

「……確認しましたが、登録されていないコアでした」

「そうか」

やはりな、と続けた千冬に怪訝そうな顔をする真耶だが、続けて報告をする。

「それと、我道くんと戦闘をしたIISですが、逃走後すぐに反応が消失。すぐさま捜索に当たりましたが、人影一つ無かつたそうです

「そうか。…いずれにせよあいつには聞かないといけないことが増えたな」

今回の事件、あいつと何か関係があるのだろう。と呟いた後、千冬は再びディスプレイに視線を戻す。  
世界最高峰の戦士。今の千冬の顔は教師ではなく、最強と謳われていた昔を思い出させていた。

「それで、彼の実力はどうだった？」

暗い部屋の中で、二つの影が会話をする。

「予想以上です。機体ながら彼の実力も相当なものでしきょう」

「フフフ…それでいい、彼にはその調子で強くなつてもらわないと困る」

「あの発想には驚かされました。思わず本気になつてしまつまう」と

その声には喜びが滲み出ている。

「そうか。…会える時が楽しみだ」

「……あつとい、すぐ」余えますよ」

「さうかもしれんな。……では、計画を進めていくとしあつ  
あのころに戻るための。人影はそう眩いで、部屋から消えた。  
「…………ええ、分かつてます……分かつてこます……それが……な  
だから」

残された少女の咳きは、誰にも届かない。

「我道、私だ、開けろ」

「やる」とは終わってさあ寝よう、ってところで普段と変わらない  
織斑先生の声がした。

「……なんですか？ 何もしてないと思つんですけど」

「引っ越しだ、ついてこい」

早いよ、予想外すぎて動けないよ。って、先行かないでください、  
場所わかんないっす。

「ん？」 ひるつて……

先生についていくとそこは見なれた場所だった。

「今日からあこつと暮らしてもいい。せひそれ荷物をまとめて」

先生についてった先は一夏の部屋だった。と、なると俺と篠が入れ替わるのが。

「…我道、一応聞いておく。あいつは…あのユウはお前の知り合いか?」

そう聞いてくる先生の顔はとても真剣で、ふざけた返事で返そうとは思えない。ってか、そんなことしたら確実にボロボロにされる。「そんなこと聞かれても…俺にユウ操縦者の知り合いなんていなかつたし…」

「せうか。ならいい、わざわざ準備をしてこ」

了解です先生。…ユウの知り合いなんてあいつらがいるんだし…だとしたら…

…あいつら、なのか?だけどあいつらは…

もやもやした気分でどうあえず一通りの準備をし、一夏の部屋へと向かう。

ん?あれは本音達か。何やつてんだ?

「おーいお前、何やつてんの?」

「わわわー、我道くん!？」

「あ、がっくん~、ちょっとあれみてみなよ~」

そうやつて指差した方向は一夏の部屋の方だった。一体何があるってんだ。

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……」

ん？あれは籌じゃないか。それと一夏。

「わ、私が優勝したら……」

よく見ると頬が紅潮してる。というか現在進行形で赤くなってる。ふと三人組みの方を観てみるとやにや笑つてた。

「えつとね、偶然ここを通つたらおりむーの部屋の前でうるさいしてたから何かなつてみてたんだよ~」

ああ、なるほど。

「つ、付き合つてもらひ~」

「……はい？」

筹の大きな声が響いた。

……つてか一夏、絶対意味分かつて無いよな、あの表情は。

## 第十一話（後書き）

ゆっくり書く時間が欲しい。わりとマジで。

武装が使えなくなつてからはや二日。

丁度いいと思い俺はオルコットにオールレンジ攻撃を撃つてもらい、それを避ける練習をしていた。

もちろん、あの時の戦闘で悔しかつたからの行動だ。

初日は十秒と持たなかつたけど、三日目は何とか三十秒程度当たらぬようになつた。

鈴のあればさすがに無理、日に見えない物をどうやって避けないと。一夏じゃあるまいし。

もちろんオルコット自身も成長してきている。俺との射撃、一夏との実戦を何度も繰り返してるので、確実にクラス代表選の時より実力が上がっているのがわかる。

今日もオルコット達と特訓をするために準備体操中。いきなり体動かしたら怪我するしな。

『報告 機体情報更新完了 武装を確認してください』

「ん？」

「どうした、藍？」

隣で同じように体を動かしてた一夏が疑問に思つたようでもういちに顔を向ける。

「いや、ちよつとな……」

機体情報更新？武装の確認…？ああ、そういうやあの時なんか出でたな。

どうなったんだ？ 時間も少しあるし一夏と模擬戦でもしてみるかな。

『武装内容

デイバイダー  
大型ビームソード×2  
ビームマシンガン  
ブレストバルカン×4  
X-グレネーダー×2  
ハイパーバズーカ』

「……へ？」

「…本物に近づいたんだよ？」

よくわからないけど、この二つのって大抵は武器が一個増えたり、ないのか？ こんなことってあるのかよ、しかも自動でなんて。

「いや、なんか機体が更新したとかどうとか…訳がわからんねえ」

「うーん…あ、展開してみたらどうだ？」

「おお、一夏が珍しいい発言をしたぞ、女子絡みでもないのに。」

「…何か変な考え方してないか？」

「いや、べつに…？」

さて、機体の状態も気になるんでさつむと起動つと。

「…特に変わった様子は無いように見えるけど…」

「あ、藍、背中が変わってる」

ん、一夏に言われるまで気が付かなかつた。  
さつきの授業まで半壊したリフレクターだったのに、今はX状に部  
品が配置されてる。

「エネルギーの容量が増えてる…って事はこの後のパーツはエネ  
ルギーを増やすものか」

「お前の機体、ただでさえダメージ通りにくいのにこんなもんつけ  
てたら倒すの無理じやないか？」

「お前には零落白夜があるだろ」

「半分しか削れなかつたけどな」

半分も削れるだけ十分だろ。オルコットのビット攻撃は全然聞か  
ないし。俺の攻撃バルカンしか有効手段なくなるし。

一夏とのんびり話しながら武器の確認をしていく。寮以外でこんな  
にゆつたりとした時間は久々な気がする。一夏の周りには大体一人  
か二人ついてるしな。

お、バズーカか、一夏にいい対抗手段を手に入れられたな。  
それでこれがディバイダか…

「…盾か？それ」

「いや、説明をみると武器と飛行サポートが出来るらしいんだ。お

お」

武器と念じると少し遅れて盾が真ん中から割れて何かの発射口が現れた。説明によると、1-9連装ビーム砲らしい。

「一夏…」の穴全部ビームを撃つりしがせ…」

「お前の機体が凶悪になつてこる気がするだ…」

対人戦に強くなつたよなGX。前のあればとてもじゃないが人に向けて撃てたもんじゃないしな。

「一夏、武器の性能も一通り確認して見たいから、ちょっと相手してくれないか?」

「別にいいけど…練習もあるからあんま本気でやるなよ?」

分かつてゐつて。

互いに武装を開いて空中に立つ。一夏は片手に剣を、俺はトイバイダと銃を。

「それじゃあいくぜ?」

俺が頼んだのだから俺から動くのが筋というものだ。右手で持っているマシンガンを一夏に向けて乱射する。

「うおっと……前より避けづらいな……」

難なく避けてよく言えるぜ。

一夏の対処法は近づかせない事が第一だな。俺は一夏や簞みたいに剣道とかやってたわけじゃないし。いや、一応護身術的なものは教えてもらつてたからここまでやれてるんだがな。

「ならむつもくこいつでー！」

マシンガンを撃ちながら<sup>イグニッシュョン・ブースト</sup>ディバイダを横向きに構え、標準を一夏に向ける。

ディバイダから放たれた光は扇状に広がり、一夏に迫る。

「う……おーー 横に逃げるのは無理っぽいな……」

「それが瞬時加速か……厄介なモン身に付けたなお前も

思わずため息が出そうになる。これで一夏はまた強くなつていくのか。嫉妬しそうだぜ。

戦いを見る中で見ると戦いの中でも見るでは大きな違いだと痛感する。

「お前はブースト使えば同じことができるだろー！」

「うちの方がエネルギーの消費がでかいんだぜ？」

「今度はこっちの番だ！」

一夏が瞬時加速を使いつちへ向かってぐる。  
イグニッシュン・ブースト

一瞬で田の前まで来たと思つと同時に斜め下から剣が飛んできた。

「うわー… うわーとき直があると助かるな」

前はこちこち切り替えることけないから反応が遅れる時があったからな。

俺は銃をしまい、バックパックからビームサーベルを取り出し振り下ろす。

一夏は紙一重でそれを避け、難を払いをしてきたので、サーベルで対応する。

「くへ… 特訓してなきや直撃だつたな」

「やつぱ強いな、藍ー。」

「やつや、お互いさま… だうつー。」

一度一夏と距離をとる。

前に戦つた時より互に強くなつてゐるのがわかる。特に一夏。

「本気じゃなんじやないのか?..」

「何の事だかわつぱりだなー。」

じりりともなく近づき、衝突する。

いつて一夏とともに戦うのは初めてな気がする。他人からのアドバイスもないし。

何度も剣とサーベルがぶつかり、激しい音が響く。

「」のままだとたぶん、腕の差で一夏が勝つだろう。だとしたら…

「！」こつで…

「…！ あぶなっ！」

俺が一夏に投げたのはグレネード。つば競り合いの最中に投げたから互いにダメージが当たる距離。  
一夏はぎりぎりのところで回避。そこが俺の狙い目。衝撃は我慢するしかないけど仕方ない。  
爆風が起き、あたりは煙で何も見えないが、一夏が回避した方向は分かっている。  
ブースト、ディバイダも全開で一夏がいると思われる場所へ向かう。

「…」

「ビンゴ。後はどうちが先に決められるかだが…

「引き分け、だな」

「実際はお前の勝ちだけどな」

「お前みたいな装備だったら首が飛んでるよ」

俺の首元には一夏の雪片一型が。

一夏の顔には俺の銃が突きつけられていた。

「」のりで終わらないといけないな

「個人的には終わりたくないけどな」

互いに苦笑いをする。なぜなら、俺らの視線の先には。

「さあ、どうしてこうなったのか説明してもらいますわよ? 一夏さん、我道さん」

とてもいい笑顔のオルコットと、

「……」

どこか悔しそうな篠の視線だった。

「これでお前との勝敗は二勝一敗一分け、か

ちなみに勝つてる方が俺な。

「次は勝つ! つてもまずはその装甲をひとつにかしてほしいぜ……」

下で待っているだらつ出来事から必死に目をそむけて話を続ける  
俺達。

「お前との戦いはひやひやするけど楽しけ、やっぱり

「それはまじめも同じだぜ」

一人して声をあげて笑う。後の事を想像したくないから。

「ああもう、一人とも早く下りてください……」

「あ、あはははは……はあ」

俺たちがこの後、延々と続く説教といつもよつ厳しい練習をする羽目になった。

## 第十四話

六月最初の日曜日。

本来なら今日は一夏と共に通の友人、五反田弾と遊ぶ約束があつたのだが、少しばかり用事が出来てしまい、後で合流する事にした。で、その用事つてのが、

「…一体何の用ですか？ 黨先輩」

「いやー、そんな顔しないでよ我道くん。今日だつて情報を入手してから急いでメールを送ったんだからさー」

そう言つてここに笑つてているのは一夏が代表に選ばれた時に会つた黨先輩。

といふか、どこでその情報を知つたのか、話してないと思つが。

「私の情報網をなめちゃいけないよ？ ネタがあるならたとえ火の中水の中！」

「どんなスキャンダル精神！？」

いかん、先輩には敬語を使わないといけないって教えられていたのについ素が出てしまつた。

「まあまあ、それは置いといて…実はお願い事があるのよね～

「嫌な予感しかしないんですけど…」

そもそも実際会ったのって一回だけだぜ？どんなお願ひ事をされるんだろ。事によつては逃げるのも手かもしれません。

「実はさ、織斑君の[写真]を撮つて欲しいんだよね」

「一夏の？」

「や。ほら、ここに男子が君と織斑君だけでしょ？ 一人の[写真]は高く売れるのよね～」

聞き捨てならない言葉があつた気がする。一人の？俺のもあるのかよ。

「ちなみに、断つたら我道くんの恥ずかしい[写真]を売りやうからね！」

「……例えば？」

「ん~…これとか？」

そう言つて差し出した一枚の[写真]。

…！

「な…何でこんな物撮れるんだよ…」

「ふふふー、もつと凄いのもあるよ~」

「わかった！ 手伝うからそれ捨てて！」

「よし！一、交渉成立ね！」

半分脅迫だつた気がする。

黒先輩は壞さないように忠告し、シャッター音がしない先輩特製小型カメラを俺に渡してきた。

…本当なら今すぐにも壞してやりたいが、あの写真を見られると色々と終わる気がする。

許せ、一夏。

「いやー、助かるよ！ 実はね、最近私の記者としての勘が『近々一夏君の写真がバカ売れするぞー！』って言つてたのよ」

勘かよ！

その勘がもしかしたら俺だった可能性もあるのか…俺じゃなくて良かった。

いざとなればこの人に脅されました！って言えばいいし。

笑顔の先輩に見送られながら俺は弾の家へ行く準備をした部屋へ戻つていった。

この時、すっかり忘れてた事があつた。

この学園には泣く子も黙る鬼教師がいたのを…

「 」 にちはー、一夏いますか？」

「 あら？ 我道君じやない。一夏ならあそこよ。」

現在弾の家の裏口。自称28歳の美人の連さんに一夏はまだいる  
か聞いてみたらあいつテーブルに座つてた。  
連さんにお礼をいい、正面口から一夏達のいる場所にいく。

「 よう弾。久しぶりだな」

「 おお我道！ 一夏に女は出来てないのか！？」

出来てねえよ。そもそも出会つてそつそつそんな事聞くなよ。

「 久しぶりです、我道さん」

「 そつちも元気そつだな、五反田」

兄とは違い、清楚な服に包まれている五反田蘭。別に構わないと  
言われたが、自分の名前を言つてるみたいで何かあれだから、妹に

は悪いが五反田と呼んでいい。

それにして…

「今日はやけに張り切ってるな」

「な、何の」としようか…普段とあまり変わりませんよー…?」

弾の表情を見つや一発で嘘だとわかる。

「遅かつたな藍、何してたんだ?」

「ん、ああ、ちょっと…な」

学園田舎でひびからか沸いてきた藍先輩に驚きの連発だったよ。

しかも出てくるたびに「[写]真がほしい」とか言つてくるし。

「? まあいいけど…」

納得いかないような顔をする一夏。気にしない方がいい。これから起ころることもな。

「ほれ、出来たぞガキども」

いつ見てもあはなれまいと思う人、五反田厳さん。

厨房から渡された皿にはこここの食堂の鉄板メニューの業火野菜炒め。味がよく、量も多いと俺等のような学生にはぴったりの一品。

飯の途中で五反田…当然だが妹…がエス学園にいくといつ中々面白い話も聞けたし。

…黛先輩の言つてた事は「これか？」

場所は移つてゲームセンター。現在、一夏と弾はエアホッケー中、

俺は銃を持つてゾンビと戦闘中。

普段見れない姿を撮らないといけないから、戦闘中の姿を一枚ゲット。

…盗撮つて犯罪だよな…でも、あの写真を見られるのは嫌だし…。テレビとかで見る無理やりやられてる人もこんなこと考えてるのか？

「うーし、俺も手伝うぜー！」

被害者を気取つてたら一夏との戦闘が終わつたらしく、弾がこつちにやつてきた。

「弾、結果はどうだつた？」

「……次回は勝つ」

なるほど、ぼろ負け、と。

隣に立ち、銃を構える弾。…「マイツ、見た目は格好いいのになあ…

「くわーー」「マイツめー！」

「あんま変わんなないな、お前は…」

あ、死んだ。頭を狙いすぎて外す事が減ったのは大きな進歩と言える……のか？

「くつ…まだまだ！」

「あー……手がだるい……」

「明日は筋肉痛かもな」

「これで腕を使う練習だつたら地獄を見るな…」

ベットに突つ伏しながら一夏が言つた言葉に苦笑しつつ、連さんに頼まれた服の修復中だ。

今日の昼飯の事もあるし、別に断る理由もないから引き受けた。ちなみに弾は何度もコンティニューして散財してた。クリアした時の喜びようは軽く引くレベルだったが。

「今月にトーナメントもあるし、厳しいもんになるだろうな」

「あー…笄が言つてたやつか、思い出した」

一週間かけて行われる学年別トーナメント。個人的に厳しい授業

がないのはありがたい。特訓づけだらうが。

「篠もアレだよな、別に買い物なり普通にせき合つてやるの」「だいみんの」と

あー……篠、お前の気持けまじの本念にて通じてなによつだ。

「……飯、食にに行くか」

「やうだなー」

やる氣のない返事を聞きながら、そのままと食堂に向かって歩き出した。

「ねえねえ我道くん！ あの噂つてホントー？」

「ん？ 噂？」

「今月のトーナメントで優勝したら付き もぐう」

食堂にはいるなつその場にいた女子が田代とく俺等を発見して、こつちに走ってきた。

「ん？ 付き？」

「い、いや、何でもないのー 篠、ほりこくわよー。」

三人組は驚くほど見事な速さで学食から出で行った。

「何だつたんだらうな、一体

「……あ、そういうことね

あの夜の事を本音達の誰かが言つたのだろう。ちよつと話に尾が付いてるが。

「何だ、藍は知つてゐるのか？」

「さあな～？ それよつさつと飯食つりまおうぜ」

今一納得してないようだが、しぶしぶと飯を頼む一夏。  
その後は特に何もなく、何かとあわただしい一日が終わった。

## 第十五話

『ねえん、我道君〜？ マシンに必要なのは何だと思つ〜？』

『えーと…操縦桿？』

『違つわあ〜ん！ そつだなび違つわあ〜ん！』

『？ ジゃあ、一体？』

『パイロットースーツに決まつてゐるでしょ！ ほりせつねと脱げ〜。  
もしくは脱がされる〜。』

『え、ちよ…め…』

「やめろ…来ないでくれ…寄つてくんなオカマ…」

「…………」

「…………はい…」

「いい勘だ」

早朝の教室に、乾いた音が響いた。

「くおおおおお…」

「まあ、寝る方が悪いな…」

「眠かったんだから仕方ないだろ…」

頭に確かに痛みを覚えつつ、さつき見た夢を思い出す。  
……いや、見なかつた事にしよう、うん。

女子のスーツの話を聞きながら寝てしまつたからだろ？か。見たく  
ない夢を見てしまつた。

「今日はなんと転校生を紹介します！ しかも一名です！」

ホームルーム早々山田先生が驚愕の発言。

「ええええええっ！？」

噂すらなかつたのだろう。女子は驚きの声を上げた。

「なあ、一夏」

「ん？」

「おかしくないか？ 一クラスに一人の転校生が同時にやつてくる  
なんて」

「だよな…俺も気になつてた」

一夏と話しつつ、教室の前のドアに視線を向ける。たぶん、クラ

ス中の視線がいつてゐると思つ。

「失礼します」

「……」

そのうちの、きれいな金髪の方を見て、頭の痛みが一瞬氣にならなくなりた。  
なぜなら、その子が、男だったから。

「シャルル・デュノアです。フランスから來ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、皆さんよろしくお願ひします」

「……男?」

無意識にそう呟いてしまつた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

なんて言えばいいのだろう?……そう、王子様という言葉が彼には似合つてゐる気がする。嫌味のない笑顔、恐らく教育されているの

だらう礼儀正しさ。まるで漫画の中から出でた虹魔の王子様のようだな、と思つた。

ただ、少し華奢じやないか？と思つたが、そんな事はどうでもいいやうだった。

「さやあああああああ——っ！」

寝起きにこの音量はちつとキツイものがある。もう少し静かにいや、無理か。転校生だし、美男だし。

「美形！ 三人田の男子！」

「しかも全員うりのクラス！」

「美形！ 守つてあげたくなる系の！」

「織斑君や我道君とはまた違う格好よさー！」

「我が世の春が来た！ まだ神は私たちにチャンスを『与えてくれたのよー』」

「地球上生まれてよかつた～！」

…とりあえず後ろの二人は何がそんなに嬉しいのか理解ができるない。

「あー、こちいち騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ血口紹介が終わってませんから～！」

流石は、といった所だろうか、織斑先生の一聲であれほど騒がしかつた生徒は一瞬にして黙る。

「…………」

もう一人の転校生、雰囲気が鋭い銀髪の少女は、一連の話をどこか見下している感があるように思えた。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

「……ではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、……ではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

話しぶりからすると、一人は知り合いなのだろうか？あの少女も先生には懐いてるみたいだし。

そもそも教官って、何やつてたんだよ、先生。

「ラウラ・ボーデウイッヒだ」

「…………」

「あ、あの、以上……ですか？」

おお、山田先生が話題を静まりかえったクラスのために振づてくれたぞ。

「以上だ」

「うわ、即答だよ。

…あー、ほら、今の一言で先生泣きそうになつてゐるじゃないか。

「！ 貴様が 「

バシンッ！

「う？」

「うわ…なんつー豪快なアプローチだよ…」

まあ、そんなんじやないのは分かつてゐけど、こきなりすぎて思考回路が停止してしまつたから仕方ない。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

「一ん、話もせずに人を判断するのはよくないと思つぜ？ いや、話せば話すほど惹かれていくんだろうけどさ。

といつが、何でこんなに冷静なんだろ？」

「こきなり何しやがる…」

「ふん……」

ボーデウィッシュはそれ以上何も話さず、すたすたと自分の席に座つていつた。

「あー、「ゴホンゴホン！」では、HRを終わる。各人はすぐに着替

えて第一「グラウンド」に集合。今日は一組と合同でヒューリ模擬戦闘を行う。解散！」

「ままにしてもしょうがないし、カリカリしてゐ一夏と転校生を連れて移動しないとな。

「おい織斑、我道。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だひつ

「言わねなくともわかつてますよ」

先生に返事をしつつ、移動の準備をする。

「ボーデウィッヒの雰囲気が何かと似ている気がして、ちょっと気にかかるけど、まあ後で考えよう。

「織斑君と我道君、だね？ 初めまして。僕は 」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから

「ああ、急がないと大変なことになるぜ？」

とにかく、急がないと女子の壁が出来あがつちまうしな。

## 第十六話

「はあ……はあ……危なかつたな……」

「だな……あと少しで捕まるとこらだつた……」

「…………いつも、あんな風……なのかい?」

「今回のはたぶん、サプライズとかなりの美形つて事が重なつて起きたのだろうと思つ。

走つて逃げて、遠回りしつつも急いで更衣室に入つたから体力と時間が危ない。

「急ぐぞ一夏……これで織斑先生に何か食らつたら洒落にならねえ……」

「そうだな……」

「急がないとヤバい事になるのは明確。一夏とほぼ同じ速度で上半身裸になる。

「わあつーー?」

「急げデュノア、大変なことになるぞ」

毎度思うけど、この着づらいのどうにかしてほしい。作った本人オカマは性能的には最高の出来だ、って言つてたから我慢してるけど。

「わ、わかったけど、こっち見ないでね！ 絶対だよー！」

「男の肌を見るなんて事に何の意味があるの？」

「まあ、本当に急げよ。初日から遅刻とか洒落にならない。今朝の藍みたいになるわ」

「うひせ、置いていくからな」

「うし、壳アヒト。一夏とデコノアはまだだかぢ、このままだと制裁受けやうだから先にいくとしよう。」

「おー、ちよつとへりてよー。」

「あ、ちよつと藍ー。」

今俺には何も聞こえない。

「ねえねえ我道君、一夏君とシャルル君は？」

「もひ来るとは思ひんだが…」

「…わひせよくも置いていかれたなあ、藍？」

「何の事だかわひぱつ」

「やけに遅かったですかね？」

「やけに遅かったですかね？」

「道が混んでたんだよ」

「嘘おつしゃい。いつも間に合へせ」

「大方、『デュノア』と長話でもしてたんだ」

「…まあ、大体あたりだな。ってか、お前も一緒にだった？」

「まあ、そうだけじゃ、お前が着替えるの遅いから『デュノア』も怒られたんだろう」

「ぐ……」

「というか、何で『デュノア』は一夏を待つてたんだろう？…まさか？いやそれは無いだろ、うん。

「一夏さんは女性の方との縁が多いですわね。そうでないと一月続けて女性からはたかれたりしませんわよね？」

「ぐはっ……」

「なに？ またアンタ何かやらかしたわけ？」

「この声は鈴だな。が、誰かの背に隠れているのかどうかこの間のわからぬ。」

「一夏の後ろにいるわよこの馬鹿一人！」

「うお、そこにいたのか、小さくて見えなかつたぞ」

毎度思つけど何でこいつら思つてゐ事を感じ取れるんだろ、読心術がデフォルトなのだろうか。

「うるさいわね藍！ こちだつて気にしてゐるよ」

まあいいわ、で何の話よとため息をつきながら話の続きを促す鈴。

「先月、鈴にビンタを食らひ、今月、つか今日転校生に出会い頭ビンタを食らつたなつて話」

「ああ…思い出しだけで痛くなつてきた」

「はあ？ 一夏は馬鹿なの？」

「 安心しろ。馬鹿は目の前に二人いる」

壊れたおもちゃのように振り返る俺と鈴とオルコット。その視線の先には

「 ですよねー」

バシンツー

「本日一日いたきましたー。」

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はいー。」

「まあかこんなにも早くー発田を食ひりつとせー」

やつぱあの人の授業でふざけたりやいけないな。気をつけないと  
な…  
それにしても…

「くうつ……何かとこうとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

」の一人はどうも一夏の事になると周りが見えなくなるっぽいな、  
少しほ自分の行動に気付いたらどうかと思うが…  
まあ、俺も見直せと言われたらそこまでなんだが。

「今日は戦闘を実演してもらおう。丁度活力が溢れんばかりの十代  
女子もいる事だしな 凰ー オルコットー！」

「はつー？」

「な、何故私までー？」

「そりゃあ、わらわの罰だらつ」

「だつたら何故あなたはー！」

「別にコイツでもよかつたが、長いから却下した」

一夏じゃないと田に見えて減らないからなー。

「お前には後で何かやせるつもりでいる」

うわ、いい気になつてたら一気に底まで落とされた、酷い。  
ちなみに、その後の事は省略することにする。  
決して、決して一夏が羨ましいとか思つてないんだからなー！

凰とオルコットは山田先生にコテンパンにされてた。先生って強かつたんだな。

「専用機持ちは織斑、我道、オルコット、デュノア、ボーデヴィッシュ、凰だな。では七人グループになつて実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？ では分かれろ」

織斑先生が言い終わるとたん男子三人組に女子が詰め寄つてきた。  
ちょっと怖い。

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「デュノア君の操縦技術を見たいなあ」

「がっくん、空飛んで～」

「何でお前だけ違うんだ」

いつもと変わらない雰囲気で話しかけてくる本音に、軽くため息をつく。

「だつて～、オリムーとかと違つて、がっくんのは全身ロボだからヒーローに助けられた感があるってかんぢやんが言つてたから～」

「あー、確かに正義のロボットって感じがするよね」

「わかるわかるー。」

なんだろう、置いてかれてる気がする。正義のロボットってあれか、一夏のために作られたロボットなのか。  
…どう考へても一夏しか得しないだろそれ。

「まつたく……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！ 順番はさつき言つた通り。次にもたつくようなら今日はエラを貰つてグラウンド四周させるからな！」

その一言でグダグダと動き出す女子。あ、ほりそんなこもつくりだとまた怒られるぞ。

「やあ～、また会つたねがっくん～」

「……もひ俺は何も言わねえ」

何でさつきのメンバーばつかなんだよ、最初からこいつなるつてわ  
うつじこのつかー?

いやまあ、別にいいんだが、大半の目がおかしい。具体的にいえばあのオカマみたいに。

まさかこいつら、機械オタク?

「ああ、我道君……手とり足とり教えてちょうだい……？」

「ああ……あの無機質な体で抱きしめられるのね……」

どうしようか、俺はまたあのオカマを思い出しちゃうになつてゐる。  
一夏に聞けば何とかなるか？あいつこつもなんだかんだ言って生き  
延びてるし。

『うん?  
どうした?』

『うるさいのハビリすればいいんだ?』

『……笑えばいいと思つぞ?』

『俺さ、星になりたくなつてきた』

『わ、黒鹿早まるなつて！』

「やいへね、がいへん」

とりあえず、今この場では本音が唯一の救いだつた気がする。

## 第十六話（後書き）

誤字、脱字、その他おかしい点がありましたら教えていただけますと幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8200u/>

---

IS 衛星砲をもつIS

2011年12月27日20時51分発行